

としては、それは餘りにはつきりしすぎてゐる。かといつて、八月三日の署名を、先生自身
身の署名だとする事は、私には到底不可能の事である。又假令八月三日の署名を、先生自
身の筆蹟だと信じるにしても、外の三度の署名が出て来ない以上、先生の思ひ違ひは、矢
張り思ひ違ひとして残る譯であつた。すると、外の三度の署名は、婆さんの探しやうが粗漏
だから見つからないので、實は何所かの隅にちやんと存在してゐるのかも知れない。

然し、打ち明けた所をいふと、あの分厚な大型の名簿を、丹念に一頁づつ繰つて行く丈
の辛棒が、私には到底持てなかつたのである。それは、たつた半年の間の名前を讀むだけ
でも、容易な仕事ではない。その上、家そのものの性質上、さう便便と二時間も三時間も
ぐづぐづ停滯してゐるのも氣がひけた。私は、自分でその先を點檢する事は思ひ切つて、
もう外にはないのだといふ婆さんの言葉を信用して、この家を出た。此所にゐる婆さん達
は閑人である。特に慾にかけては抜目がない。慌しい心持で私が一人で探すよりも、この
婆さん達が二人で探した方が、餘つ程効果があるに違ひない。その婆さんがないといふの
だから、是はほんとにないに違ひないと考へたからであつた。

歐羅巴の大戦前後から、渡歐する日本人が激増した。さういふ日本人は大抵一度はロン
ドンに足を入れた。その中には先生の崇拜者や讀者も澤山あつて、私のやうに先生の『カ
ーライル博物館』の爲に、カーライルの家を見物に行く人も可也多に違ひなかつた（如
何に日本人が此家に澤山来るかは、婆さんが先生の署名のある名簿を、第何巻と第何頁と、
暗記してゐるのでも知れる）。その中で又格別に熱心な男は——例へばこの婆さんへ
『色鳥』を贈つたやうな熱心な男は、——この婆さんを捕まへて、プロフェッソ・ナツメ
（このプロフェッソ・ナツメといふのも、その内の誰かが教へたものに違ひない）は此所に四
度来た筈だ、その署名は何所にあるかとか、お前があゝの時の案内のお婆さんかとか、お前
が案内をしたにしては、お前は若すぎるぢやないかとか、そんな色んな下らない事を訊い
たり訊かせたりしたに違ひなかつた。その上そんな事を言つたり言はれたりしてゐれば、
急に自分の肩身が廣くなつたやうな氣になる者もあるだらうし、それほどではないまでも、
故國の作家の名前がかういふ所で話題に上る事は、誰にでも悪い氣持のする事ではないの
だから、自然一シリングの御禮をやる所は奮發して二シリングもやらうといふやうな氣持

にもなるだらう。さういふ點では、日本人は、馬鹿見えのする程氣前が可い。それを見てとつてこの婆さんは、自分が先生を案内した事にしたり、それではあんまり年が合はなすぎるから、先生は非道いと言つて見たり、色色辻褃の合ふやうに苦心して、下手な小説を書いたものであるに違ひない。

この婆さんが先生の案内をした婆さんでないといふ事は、例へば、先生の案内をした婆さんは、先生を裏庭に連れて行つて、この庭の隅にはカーライルの愛犬ニロが埋められてゐる、その墓標が當時はあつたのだが、その後取拂はれて了つた、といふやうな事を説明するが、この婆さんは其所で、是はカーライルが手づから植ゑたものだと言つて、葡萄の葉と蔦の葉とを一枚づゝ摘んでくれはしたけれども、犬の話は一言も觸れなかつた、といふ事からでも、分かる。この婆さんは、恐らくそんなアネクドットは知らないのだらう。その上、先生の來たときには、木らしい木、草らしい草が少しもなく、「昔は櫻もあつた葡萄もあつた」と婆さんが説明してゐる。然るにこの婆さんは、カーライルが手づから植ゑたものなどといつて、葡萄の葉だの蔦の葉だのをわざわざ摘んでくれるのである。

そんな婆さんの言ふ事を、署名の點だけで、どうして信用する氣になるのかと訊かれると、私には、納得の行く返事が出來さうもない。然し私には、さういふ婆さんだから、その點だけは、信用して可いのだ、と言ひたい氣持さへある。何しろカーライルが手づから植ゑた蔦だとか葡萄だとか言つてその葉を摘んでやれば、カーライルにアフェクションを持つて此所に来るお客さんは、リアルにカーライルと握手でもしたやうな氣持になつて、そんな取計らひをする婆さんに好意を持つてに違ひない。さういふ心理に通じてゐる婆さんの事だから、若し見つけ得られるものなら、四度は四度ながら、先生の署名を見つけたいに違ひなかつた。勿論此所だけに限つた事ではないが、佛蘭西でも獨逸でも殊に伊太利なぞ、番人といふ番人は何所の番人でも、大抵乞食のやうに金を欲しがらる。一文でも餘計に金のとれさうな事があれば、どんな事でも敢てするだらう。二人で家番をして案内をして、餘暇で名簿を繰つて見る位の事は、彼等にとつては何んでもない事である。恐らく二人の婆さんは丹念に、初めから終まで、繰り返し繰り返し先生の署名を探して廻つて、結局出て來たのが、唯一つ、八月三日の署名であつたのだらう。然したつた一つでは仕様がな

から、當惑はしたものの、到頭、四度来て四度目に書いたのが是だ、是が最初で最後の署名だなどと、切ない辯明を思ひついたものだらう。

それにしても誰か倫敦にゐる人、若くは行く人で、もう一度あの名簿を點検して見てくれる人はないものかと思ふ。もう一度確めた上で、先生のあの思ひ違ひが、ほんとの思ひ違ひであつたかどうか、はつきりきめる事にしたいといふ氣がする。〔女性〕——大正一三・一二〇

小説とそのモデル

世の中にはまづたく不思議な心理があるものである。新聞で説教強盗といふのが大評判になると、自分がその説教強盗だと名のり出る者が、四人も五人も出て来る。夏目漱石の『坊つちゃん』が有名になると、『坊つちゃん』の中に出て来る山嵐といふのは、おれの事を書いたのだと名のる者が、二人も三人も出て来る。

『坊つちゃん』の中の山嵐は、それでも、磊落で痛快な人物だから、ある種の人が、自ら山嵐をもつて任じるのも、別に不思議ではないのかも知れない。然し自ら『虞美人草』の中の小野さんをもつて任じる者があるに至つては、説教強盗同様、甚だ理解しがたい。是は又聽きの事であるから、眞偽のほどは保證しかねるが、死んだ厨川白村は、『朝日新聞』

に『虞美人草』が連載され出した當時、自分の事を自分で小野さん・小野さんと言つてゐたのださうである。もつとも小野さんは、『虞美人草』で初めの内は、大學を銀時計で出た秀才で、然も藤尾といふ美人のお眼鏡に叶つた色男の役を勤める、二枚目役者であつた。白村も、或はその期間だけ、自ら小野さんをもつて任じてゐたものかも知れない。——それは今からなんともきめる譯には行かないとしても、兎も角有名でありさへすれば、悪い方で有名であらうが、良い方で有名であらうが、そんな事は構はない。ただ有名である事を見えにするといふ心理が、或種の人人を動かしてゐる事は、どうも疑ふべからざる事實であるやうに思はれる。是は或は、我我一般の心の中に動いてゐる英雄崇拜の心が、かういふ心理を育て上げるものかも知れない。

是とは多少趣きを異にするが、一方では、小説を読みさへすれば、必ず、是は誰誰をモデルにしたものであると、その小説の中の人物を、一一實在の人物に當て箴めて考へなければ氣のすまない、一種の讀者もあるやうである。是は、モデルがなければ小説家は、小説を書く事が出来ないものだ、冥冥のうちにきめてかかつてゐるからの事であるに違ひ

なかつたが、然しそれ以外に、さうする事によつて、初めて小説をリアルに受とる事の出来るやうな讀者もあり、又さうする事によつて、自分が何かその小説家の祕密に參與し、もしくはその小説家に接近して居るといふやうな、特別な心持になる讀者もあるからの事に違ひないと思はれる。一方から言へば、さういふ讀者が、山嵐を三人もこしらへ、或は厨川白村を小野さんにしたのだ、と言へば言へなくもないのである。『草枕』の中の峠の茶屋の寫眞を掲載するのみならず、その茶屋の婆さんの寫眞をとり、あまつさへ『草枕』の舞臺は肥後の小天温泉であると言つて、當時其所の温泉宿の娘さんであつた人を、那美さんのモデルであると確信し、その人の過去の歴史を調べようとまでするものも、この種の讀者であるに外ならなかつた。

ロンドンのカーライル博物館には、五十恰好の婆さんがゐてプロフェッソ・ナツメは、私の事を婆さん・婆さんと書いてゐるが、當時私が婆さんである筈がないぢやありませんかと、不平さうな口を利いてゐた。なるほどこの婆さんが二十四五年以前、婆さんであつた筈はない。然し漱石の『カーライル博物館』の讀者は、是が非でもこの婆さんを、漱石が

カーライル博物館を見に行つた當時の婆さんに仕立て上げなければ、承知が出来なかつたのである。勿論『カーライル博物館』は小説ではなかつた。それだけに、漱石が其所を訪問した年代にはお構ひなく、二十年もその上もたつてから、其所を訪問した者が、其所にゐる好い加減な婆さんをつらまへて、漱石が訪問した當時の婆さんに仕立て上げてしまつたのは、まづ無理もない所もあると言へもするが、然しこの種の讀者は、そんな所で、決して踏み止まつてはゐないのである。『坊つちゃん』に就いて言へば、この種の讀者は、あすこに出て来る狸は誰、赤シャツは誰、うらなりは誰と、作中の人物を、一一實在の人物に翻譯するのではないと、どうしても納得が行かないらしいのである。獨逸ではかういふのを、モデル狂モデル・マニアと呼んでゐる。

漱石は嘗て、『坊ちゃん』に關するモデル狂が猖獗を極めてゐた時分に、松山の中學で當時文學士と言へば、自分がたつた一人だつた、赤シャツを實在の人物に求めるとすると、結局赤シャツは自分の事を書いたといふ事になるより外はないぢやないか、と言つて笑つた事がある。然るに猿之助が三四年前『坊ちゃん』を上演した際には、狸の顔の拵へから、

赤シャツの色、うらなりの服装、その他いろんな人物の、扮装・言語・動作の末に亘つて、それは「違ふ」と言つて、一一訂正を求めた、熱心な見物さへあつたのださうである。既に「違ふ」と言ふ以上、その見物の頭の中には、一一實在の人物が、はつきりした姿をとつて、生きて動いてゐたものに相違ない。然も作者自身は、『坊つちゃん』の中の人物に、一一モデルがあるといふ事を、全然否定してゐるのである。にも拘はらずこの見物は、一一モデルがあるといふ事を確信してゐるのみならず、その扮装・言語・動作の末に亘つて一一記憶してゐるらしく、役者のそれを「違ふ」と言つて、敢て訂正して少しも憚る所がないのである。是は驚くべきモデル狂であつた。この見物は、作者の知らない事までも知つてゐるのである。

勿論小説家の中には、モデルがなければ小説が書けないといふやうな人も、ゐるには違ひなかつた。然し假令モデルを使つて書いたとしても、そのモデルが一度小説家の頭の中を潛つて、小説の中の人物となる以上、いくらその小説家はそのモデルを忠實に寫生しようと思つてゐたとした所で、そのモデルは、所詮その小説家の觀た特殊なモデルで、決し

てモデルそのものではないといふ事は、事事しく説明するまでもない事であつた。ゲーテは自分の自叙傳を書いて、それに『詩と眞實と』といふ名前をつけてゐるが、嚴密に言へば、自分の自叙傳を誠實に書かうと志してさへも、それは結局「詩と眞實と」の混淆したものでしかあり得ない筈なのである。この事は、同じ場所をかいてゐる二人の畫家の畫が、決して同じものであり得ない事を考へて見ても、明白であつた。ミレーの『種を播く人』をゴッホが模寫してゐるが、いくらゴッホがミレーに傾倒し、いくらゴッホがミレーを忠實に模寫しようとしても、所詮ミレーはミレーであり、ゴッホはゴッホで、二人の畫の間には、實に截然たる區別があつたのである。苟くも人間である以上、どんなに「眞實」を心がけてゐても、其所には「眞實」でないもの、架空なもの、想像にしか過ぎないもの、主觀的なもの、——即ち「詩」が入り込んで來る事を、どうする事も出來ないのである。従つてモデルにされたと言つて怒るのも馬鹿氣た事であれば、またモデルにされたと言つて自慢するのも馬鹿氣た事であつた。要するに小説の中の人物は、その小説家のもので、外の誰のものででもないのである。

その上多くの小説家は、モデルを使はずに小説をかく。勿論どんな空想の饒かな小説家でも、無から有を生ぜしめる事は出來ない。従つて小説家が、自分の見た事・聞いた事・感じた事——自分が現實に體驗した事でなければ、書く事が出來ないのは、言ふまでもない。然しモデルを使はずに書く小説家は、自分が現實に體驗したものから、小説の材料を取り出して來る際に、モデルを使はなければ書けない小説家よりも、遙に自由な態度をもつて、是を選択する。必要があれば一つの材料を、十分使ひ切るまでも使ふが、然し必要がなければどんな貴重な材料でも、棄ててしまつて省みない。モデルを使ふ小説家のやうには材料に支配されずに、材料を支配するのである。従つてある場合には、甲のモデルから一つの特徴をとり、乙のモデルから他の特徴をとり、丙のモデルから第三の特徴をとり、さまざまの特徴を方方から寄せ集めて來て、一人の人物を作り出す事もあり得るのである。それがまづ行くけば、鶴のやうな化物しか出來上がらないのは當然であるが、然し小説家の創造の歡びは、さういふさまざま材料に息を吹き込んで、一人の人間を描き活かし、もしくは一つの世界を描き活かす點にあつた。——映畫では、モンタージュといふ事が、

一時盛んに唱道された。ばらばらな箇箇の材料を組み合せて、活きた一人の人間に纏め上げ、活きた一つの世界に纏め上げる小説家の仕事は、正にそのモンタージュなのである。映画ではやつとこの比になつて問題にされ出したモンタージュの理論は、實は小説では既にとうの昔から、それぞれの作家によつて、著者實行されて來てゐるのである。

勿論映画の人達が、その理論そのものを、事新しく宣傳しようとしてゐるのでない事は、言ふまでもない事であつた。映画に於けるモンタージュの理論は、理論そのものよりも、その理論をどういふ風に適用すれば、映画も亦外の藝術と同じやうに、自由で、且つ創造の歡びを持つ事の出来る藝術になり得るものであるか——その實際的な適用の道を映画の上に載り拓いて見せた點に、偉大な、劃期的な功績を示してゐるのである。従つてモンタージュの理論が、古來から小説に於いて著者實行されて來てゐるといふ事は、映画に於けるモンタージュの理論の功績を少しも傷つけるものではなかつたが、然しをかしいのは、モンタージュといふものが、映画のみにあつて、外の藝術にはない——映画獨特のものやうに感じてゐる人人が、意外に多いといふ事である。もしくは映画ではモンタージュを

認めても、他の藝術では、殊に小説では、モンタージュを少しも認めまいとする人人が、意外に多いといふ事である。是は或は日本で映画の事を兎や角言ふ者が、映画以外の事に關して、一般的な教養を少しも持つてゐないせゐであるのかも知れなかつたが、然しそれは分らない。ただこの現象に際してすぐ想像される事は、この事と小説に於けるモデルの傾向との間に、何か密接な關係がありはしないかといふ事である。小説に於けるモンタージュを認める事にすれば、小説に於けるモデル問題は消滅する形になるし、小説に於けるモデル問題が消滅する事になれば、モデルを探がす理由も亦消滅しなければならぬからである。猿之助に小言を言つた『坊つちゃん』の見物などの事を考へれば、勿論是は極めて稀なる例外であるに違ひなかつたが、然し是は、一般の人人の映画に對する態度と小説に對する態度との相違を、鮮明すぎるほど鮮明に表現した例にはなりさうに思はれる。小説では、それがリアルに書かれてゐればゐるほど、人人はどうしてもその背後に、丁度それと並行するやうな、事實があつたものと、豫想しなければゐられないのである。小説に用ひられた箇箇の材料が何處から來たかを研究し、それと小説の中に描かれてゐ

るものとを対照させて、その小説の作家が、何故にこの部分を採用して、あの部分を棄てたかといふ事を點檢し、其所からその作家の興味と目的とが何所にあつたかを探り出さうとする事は、専門家の研究に屬する事で、普通のモデル、狂の目的とする所とは、その目的を異にするものである。然しそれさへもとかく、モデル、狂に罹る危険を持つてゐる。ドイツのキール大學の一教授は、ゲーテの『ギルヘルム・マイステル』の中に出て来るミニョンのモデルの研究を發表して、ドイツの學者の間に、物笑ひの種を播いた例さへもある。従つて普通の讀者がモデルを探すといふ事は、寧ろ馬鹿げた事であつた。小説家は、結局の所は、自分自身を幾つにも分身して、その分身に他人の著物を著せて、世の中をあるかせてゐるのである。讀者は、モデルの事などを氣に病むよりも、その小説家がどういふ人間をどれほど活活と描く事が出来てゐるかに注意して、其所からその小説を鑑賞し、もしくは批評する事を考へた方が、遙に賢明でもあれば、また遙に正しい小説の読み方でもあつた。詩人の特權は、自分一人で、いろんな人間になれる事であると、ボードレーは言つてゐる。實際一度その人になつて見たのでなければ、いくらモデルを使つたとしても、小説家は、そのモデルを描き活かす事の出来る筈がないのである。（『專賣協會誌』——

九・五・二二）

漱石先生の『オセロ』

野上豊一郎君が『漱石のオセロ』といふ名前で、先生が大學で講讀した“*Othello*”の筆記を出版した。私のやうに、野上君と一緒にこの講讀に出席した者にとつて、この出版は、二十四五年後の今日、胸を躍らせながら經驗した當時の *schoene Stunden* を、我々の胸の中に、もう一度まざまざと蘇らせてくれるものとして、寔に有難い出版である。然し是は、この講讀に出席しなかつた人たちにも、假令私たちの受けた感激をそのまま傳へ得ないまでも、いろんな點で、可也参考になるものを與へるものではないかと思ふ。殊に所謂漱石黨の人たちには、今まであまり紹介される事なかつた、特殊な方面の漱石先生を覗かせるものとして、是は歓迎されて可い出版である。

今から考へ返して見ても、ほんとに先生の Shakespeare の講讀は、面白くもあつたし、また有益でもあつた。先生は教場には、いつも Daighton の注釋本を持つて來てゐたやうであつたが、外の注釋にも随分よく眼を通してゐたらしかつた。是はある意味から言へば當然の事ではあるが、然し先生は、我我學生の前に、いろんな人の名前をならべ立てて見せるといふやうな事を、決してしなかつた。學者といふものは一體に、さしたる必要もないのに、誰の説だの彼の説だのと、自分の讀んだものは、みんな並べ立てて見せないと氣が済まない、不思議な癖を持つてゐるものである。その點では先生は、決して學者ではなかつた。然も先生の講讀を聽いてゐると、可い説を出してゐる人と、下らない説を出してゐる人とは、必要に應じて、いつのまにか、我我の頭の中に這入つてゐるのである。多くの人の説は、一度すつかり先生の頭の篩にかけられた上で、私たち學生の頭の中に注ぎ込まれた。さうして私たちは注釋者の説を並べる事よりも、その注釋者の説を選択する事――それよりも寧ろ自分の説を持ち得る事の必要を教へられた。

その上先生は英語の表現を、その内容を少しも變へずに、びたりと日本語の表現にしてしまふ事が、實にうまかつた。我我の經驗に徴しても明らかであるやうに、我我は偶には外國語の表現にびたりと適合する日本語を見つけ出す事もあるにはあるが、多くの場合我我は、その調子で全體を貫ぬき通す事が出來ない。我我の翻譯では、ひどく氣の利いた日本語が出て來るかと思ふと、すぐそのあとにはごつごつした翻譯口調が続いて、決して一つの *Stil* に纏り上がる事がないのである。然るに先生の Shakespeare の翻譯には、氣の利いた江戸詞を基礎とした、*flexible* で活活した、品の好い立派な *Stil* があつた。是は先生が英語に對する *delicate* な又しつかりした語感を持つてゐて、表現の形式に煩はされる事なしに、深い所で感じて英語を受取るからであるには相違なかつたが、ともかく先生の豊富な自在な日本語を聽いてゐると、一人で讀んでは兎角よそよそしい心持を経験しがちな Shakespeare が、非常に我我に近いものとして、我我の心の眼の前に現はれた。殊に先生の翻譯には呼吸と性格とがあつた。先生は、戯曲に現はれて來るその場その場の臺詞に、一一細かに、その人物のその場合の心持に同化してゐるらしく思はれた。是は一寸普通の人の眞似の出來ない所である。又その機微は、我我の書き入れなどでは、到底表

現し得ないものである。

最後に先生の講讀には、先生獨特の、戯曲の構成や、戯曲の中に出て来る人間などに關する、批評だの感想だのが、到る所に挟まれて、色んな點で、我我を藝術的に刺激した。その點では先生の Shakespeare の講讀は、先生自身の文藝學の臨床講義でもあつた。臨床によつて我我は、我我の感じ方、考へ方を、實際的に、具體的に、廣め且つ深めて行く事が出來た。先生はこの點では格別準備らしい準備はしてゐなかつたやうである。寧ろ先生はこの點では、興にまかせて、思ひつくまを話して行つたらしくも思はれる。然し我我にとつては、それが、いかにも潑刺としてゐて、面白かつた。また有益でもあつた。さうして我我の大學時代に於ける文藝教育の最も根本的なものは、先生のこの講讀からのみ得られたと言つても、少しも過言ではないのである。

——野上君は、英文學專攻の學生であつただけに、教場で先生の言葉を、隨分丹念に書き留めたい。足りない所は、恐らくうちへ歸つてから、何かの本を参考しながら、一丁寧に整理してゐたものであらう。この筆記は可也整然と、體裁をなした筆記である。

私のやうに、根が専門の學科でなかつたからかも知れないが、多くは聽つばなし書きつばなしで、それさへ兎角先生の顔を見てはぼんやりしてゐた學生の、亂雜極まる筆記に比べては、是は正に霄壤の相違である。私は不圖思ひ立つて、當時私が使つた Cassell 版のポケット本を取り出し、其所に書きとめられてゐるものを野上君の筆記と對校して見て、屢きまりの悪い思ひをしなければならなかつた。勿論野上君の書き落したり聽き落したりしてゐるものを、私がちやんと書きとめてゐるといふやうな事も、いくつかはないでもないが、概して野上君の筆記は克明に出來上がつてゐるのである。

然し野上君もその緒言で言つてゐるやうに、野上君の書きとめ得たものは、先生の口を洩れたものの、ほんの何分の一かであるに過ぎなかつた。といふ事は然し、無論、野上君の筆記を輕蔑する事を意味しない。もしそれが何等かの意味で、輕蔑的な意味を含んでゐるとすれば、寧ろそれは人間の筆記能力そのものに對する輕蔑であるに外ならない。筆記し得たものの分量から言へば、私の筆記など、その野上君の筆記の、半分の分量が、やつとあるかないかの程度である。唯、人の言ふ事を筆記した事のある人、もしくは自分の言

ふ事を筆記してもらつた事のある人は、誰しも覚えがあるに違ひないが、話す方で一一筆記される事を勘定に入れて話をするのでない限り（それさへ十分問題になる）は、また筆者の方でその話を噛みしめて味ふ事を断念して専念筆記する覺悟を立てるのでない限り（是も又前と同様問題ではあるが）は、その話を十分洩れなく、十分精確に筆記する事は、全然不可能の事であつた。筆記するために費される注意と精力と時間とは、筆記する人によつて選み上げられた一つの事を把握する事には精密であり得ても、そのため、それ以外の事には、例へばそれに先立ち、もしくはそれに續く事には、必ず疎かになつてしまふ。然も話す方から言へば、その選み上げられた一つの事が、必ずしも、自分の話さうとした事の眼目をなすものではなく、どうかすると、それに先立ち、もしくはそれに續く外の方が、更に一層必要な事であつたといふやうな事も、随分あり得るからである。また、その選み上げられた一つの事が、話さうとする事の眼目であつた場合でも、それが前後の關係から截り離されて書きとめられると、話す方の意志とは、丸で違つたものになつてしまひ得るからである。

先生は恐らく、自分の言ふ事が一一筆記されるものだとは、豫想してゐなかつたに違ひない。勿論先生は、自分の眼の前で學生達が、自分の本に書き入れてゐるのを、教壇の上から眺めてゐた。どういふ量見で君は俺の顔ばかり見てゐるのかと、私は先生から訊かれた事さへある。先生は、學生は本に假名をつけるものと、思つてゐたのかも知れない。先生は、textの言葉の意味を説明する際には、寧ろ噛んで含めるやうに、或時は繰り返して返し日本語に直してさへもゐたやうである。然し先生は、言葉の意味を説明する時には、丁寧でも、臺詞の nuance を、そのまま delicate に日本語にする時には、別に我我に、此所はかういふ風に、譯すべきだといふやうに、注意を與へる事がなかつた。寧ろそれは、本能的に自然に、さういふ言葉となつて出て來るらしかつた。殊に戯曲の構造に關し、戯曲の性格に關し、もしくは特別な境遇の下で特別な反應を呈する、一つの性格の反應の仕方に関し——一口に言へば、問題が text の言葉の意味から離れて、藝術としての戯曲に關する、先生自身の批評や感想が述べられる際には、特に先生の話は、言ひたい事をどしどし言つてのけるといふ風で、筆記されるといふ事などは、全然豫想しない様子であつた。

その時の先生の話には、繰り返しがなく、徂徠がなく、従つて筆記し悉さうとするには、餘りに早すぎる氣がして、我我にはひどく骨が折れたものである。自然我我は、我我流にその要領をつまんで書きとめて置く事で満足するか、細かく筆記し出して、途中で外の大事なと思はれる事に移つて行き、書きかけはそのまま尻切とんぼにして置くか、それであれば、筆記を初めから断念して、じつと先生の話に耳をとめてゐるか、この三つより外に、なんとも致し方がなかつた。然し、筆記を断念してじつと先生の話に耳をとめてゐるといふ事は、一番身にはなつても、身になつてしまふだけに、忘れると、もう思ひ出して見る手がかりもない事が多かつた。結局我我は、前の二つの方法の、どつちかを選むといふ事に落ちついてゐた。

——さういふ不完全なものを、元來何の必要があつて、わざわざ出版するのかと、聞き直ほつて訊かれるとしたら、野上君は恐らく、尤らしい返事は出来ないに違ひない。不完全な事は、野上君も、初めから承知してゐるからである。然しそれでも我我には——漱石先生に親しみを持つてゐる者には——たとひそれが、先生の口を洩れたものの、ほんの何

分の一かに過ぎないものであるとしても、然もその何分の一かさへ、十分精確には、先生の言葉を傳へ得てはゐないとは言つても、とにかくにも、此所には大學の Shakespeare を講讀した漱石先生の「面影」は出てゐるのである。勿論それは、當時の英文學科の學生野上豊一郎によつて捕捉された、夏目漱石の「面影」であるに過ぎないのかも知れなかつた。然しそれでも「面影」は「面影」である。假令それは、限られた範圍で活動してゐる夏目漱石ではあつても、その中で、素朴な驚嘆と感激ある誠實とを持つて受取られた、夏目漱石である。我我は是を機縁にして、我我が銘銘に持つてゐる、我我の夏目漱石を、再び我我の中に描き生かす事が出来る。夏目漱石を知らない人たちと言へども、是を讀んで、英文學者としての、また英文學を材料とする文藝批評家としての、夏目漱石の「面影」の幾分を髣髴する事が出来る。——とすれば、それだけで既に、出版の理由は十分であるといふ氣がするのである。

私は此所で、私が書きとめてゐて、野上君の筆記には漏れてゐるものを、細大書き上げて、その補遺にしたいと思ふ。是は、野上君の筆記に漏れてゐるものを補ふ事によつて、

いくらからでもその漱石先生の「面影」を濃厚にする事が出来ると思ふからである。——元來私は、當時の講讀に出席した學生の書き入れを、出来るだけ數多く集めて、今日可能の最大限度で、漱石先生が大學で講讀した Shakespeare の凡つての作品の、完全な筆記を公にしてもらひたい希望を持つてゐた。然しこの事は、餘程の犠牲を覺悟しなければ、容易く出来る仕事ではないやうである。それ故野上君も恐らく、最も手數のかからない、自分一人の筆記を公けにする氣になつたものであるには違ひないが、然し是は勿論、多くの人の補遺を俟つのでなければ、決して完全な筆記とは言はれ得ないものである。野上君も或は篤志の補遺を豫期して、敢て是を公けにする氣になつたものかも知れない。私が是から書き上げて行かうとするのも、一面から言へば、その恐らく野上君が豫期してゐるに違ひない、篤志の補遺の一分を充たしたいからであるに外ならなかつた。然も私が書いた全部を加へて見たところで、先生の“Othello”の講讀の筆記は、尙完全であるとは言へない。二人ともに、聴き落したり、聴き違へたり、書き違へたりしたものが、いくらもあるに違ひないからである。もし當時の書き入れを、當時の學生たちの凡てが、今日も尙保存して

あるならば、その凡ての書き入れを参照してこそ、初めて稍完全に近い漱石先生の“Othello”の講讀の筆記が出来上がるであらう。——そんな熱心な研究者が、是から先き出て来るかどうかは分からない。然し、さういふ熱心な研究者を豫想して、その人のために一石を寄與しようとする志が、私をして是を書かしめる、最後の根據をなすものである。

〔私の筆記を書き上げるに就いて、紙面を節約する爲に本文は掲げない。従つて便宜上行數の數へ方は、野上君の『漱石のオセロ』による事にする。是は、野上君が筆記してゐる事と同じ事は、大差がない限り、一切此所に書き上げない、その意味では凡て野上君の本を出發點とするものだからである。——序に、野上君は、先生の“Othello”の講讀が明治三十八年九月から始まつたやうに書いてゐるが、是は野上君の記憶の誤で、“Othello”は明治三十九年の正月から始められた筈である。さうして私の當時の日記によれば、明治三十九年十月十八日（木曜）に講了になつてゐる。明治三十八年九月には、我我は、前學年の繼續として、途中から“Tempest”を聴いたやうである。然し、是は或は私の

覚え違ひかも知れない。』(『英語青年』——五・七。)

Act I. Scene i.

1. *I take it much unkindly* いやになつちまふよ。おもしろくもない。勘辯しきれない。冗談じゃなし。
4. *'Blood* = *by God's blood.* Profane oath は James の時に禁ぜられたので、訛つてかういふ風に言ふ。Marry を Mary (Virgin) の代りに用ひるのも同様である。
9. *In personal suit* 自身の希望で。
10. *Off capped to him cap* といふ言葉それ自身に既に挨拶をするといふ意味があるから、Off は Off の間違だらうといふ説もある。
13. *bombast* 中味がなくて膨れてゐる貌、綿入のやうなものにも用ひる。
19. *a great arithmetician* 實際的の手腕がなくて、口先だけで巧い事をいふ人。

23. *the division* 排列。
35. *'t is the curse of service* それが役目の悲しさだ。
46. *doling* 難有い事に心得る。
48. *cashier'd* = *get, or is cashiered.* 解雇される。
50. *trimm'd* = *traided.* *usages* は *usage* の誤だらうといふ説もある。
52. *throwing* たたきつける。軽蔑の意味がある。
71. *Plague* …… *flies* 蠅のやうになつて苦しめてやれ。
103. *in them power* = *in their power.*
121. *Sir I will answer anything.* 前の *answer* を受けてはゐるが、責任を持つといふほどの強い意味は持つてゐるやうもない。
124. *odd-even* 十二時十分前後、或は十二時前後。
149. *gall* 傷ける。 *check* 非難。
151. *loud* ひと目見て分かる。

157f. *sign of love, ……* 此 *sign* は看板である。内にあるものを外に現はすのが看板である。看板に偽なしといふが、是は偽ある看板である。

161ff. Brabantio の錯亂した心の有様をよく現はしてゐる。實際の場合には、かういふ風に會話と主觀とが錯綜するやうな事はなさうに思はれるかも知れない。然し動亂してゐる心持を——娘に對する愛情の爲に動亂してゐる心持を現はす爲には、かういふ風に描くのが一番可いやうである。

162. *my despised time* 鏝一文の値うちもない、生き甲斐のない餘命。

165. *Who would be a father!* 人の親なんぞになるもんぢやない。

167. *Past thought* 思ひがけもなく。

170. *O……the blood* 娘が親を騙すやうになつちやあ。

177. *Some one way, some another* 是は娘を探しに行く人達に向つて言ふ言葉である。

180. *To get good guard and go along with me* 十分の隊を拵らへてくれて、私を先登に立たせるなら。

Act I. Scene ii.

1-2. *Though in the trade of war ……* 戦争は商賣だから人も殺しますが、平時は人をあやめるやうな事はしないだけの覺悟はしてゐます。

5. *here* 肋骨の所を指さす。

6. *'Tis better as it is* そんな餘計な眞似をしないで可い。Booth はこの *as it is* を長く引いて言つた。この言葉はある意味から言ふと、この戯曲の *keynote* をなすものである。これに *Ohello* の性格が分るからである。

9. *the little godliness* がむしやら者。

13. *in his effect voice* の利き目が。

14. *As double as the duke's "Macbeth" I. iii. 140* に *my single state of man* とある。たより少ない心持の意味に *single* といふ字が使はれてゐる。*double* はその反對

に、勢力ある意である。又議長が *double voice* を持つてゐると言へば、投票を二枚する権利を持つてゐるといふ事である。然し此所では前の説の方が可い。

23. *unbonneted* 是は *inbonneted* だといふ説もある。Coleridge は帽子をとる方の意味にとつて、然もそれを *figurative* に解釋しようとしてゐる。それは文字に拘泥しすぎた解釋である。

26. *unhoused free condition* 一家をなしてゐない、繫累のない身。

29. *the raised father* 驚ひつて叩き起された。

35. *The goodness of the night upon you* 夜は人に *bad influence* を興へるものだから、それでそんな事のないやうに祈る意味だとする人もあるが、それはすこし穿鑿にすぎる。是は「今晚は」位の意味で結構である。

40. *a business of some heat* 火急な用事。 *galleys* 早打の船。

49. *what makes he here?* Eliza 朝では *make* と *do* とを混用してゐた。此所の *makes* は *does* である。

50. *a land carrack* 大船の一種、うまい獲物を手に入れたといふのを、海國のヴェニスだから、かゝらぬ *a land carrack* などといふ比喻を持つて來るのである。

51. *he's made for ever* *he is made man* とか *he is made* とかと言はれる。生涯優に人の上に立つだけの *fortune* を持つてゐる人といふ意味である。

63. *Damnd* *as thou art* 獄道者め。

68. *curled* Johnson の説によると、是は *elegantly and ostentatiously dressed* の意味であるといふ。

69. *a general mock* 世間のもの笑ひ。

72. *gross in sense* 明明白白な事。

75. *That weaken motion* *motion* は、物の黑白を分つ *faculty*, 然し Shakespeare の時代には *weaken* を *waken* と讀ませて、*waken* の意味に用ひる事もあつた。もしさうだとすれば *motion* は勿論 *passion* の意味にとられなければならない。

83. *cue* 役者が舞臺に出て會話をする時、甲が臺詞を言つてしまふと、すぐそのあと

から乙が自分の臺詞を言はなければならない。この時乙の方で甲の臺詞が何所で切れるかを承知してゐなければ、乙はうまく相手に調子を合せて、自分の臺詞を言ひ出す事が出来ない。それで乙は甲の臺詞の最後の言葉を、自分の臺詞の最初の言葉の頭に喰つつけて、自分の臺詞を覚える。是が cue である。例へば此所の *Othello* の臺詞を例にとれば、*Othello* になる役者は、前の *Brabantio* の臺詞の最後の言葉の *peril* を、自分の臺詞の初めの言葉の *Hold your hands* の前に喰つつけて、自分の臺詞を覚えるのである。

84. *prompter* 役者が舞臺で絶句した時に臺詞をつけてやる役、日本の芝居で言へば黒ん坊である。

Act I. Scene iii.

6. *the aim reports* 當てすつぼうの報告。

18. *By no assay of reason* 是は、前行に *not* があるから、*double negative* になつ

てゐる。この *no* は不必要な *no*。

23. *with more facile question* 抵抗力がなくつて。

46. *Write from us to him* 我我の名前であの男の所へ手紙を書きなさい。

56. *flood-gate* 水が水門を溢れ出るやうな風。

57. *engults* 呑み込む。glut は喰しん坊の事を言ふ。

58. *And it is still itself* 餘す所は唯 *particular grief* のみである。

59. *Ay, to me* 私にとっては死んでも同然だ。是は前の *Dead?* にかかるのである。日本語ではかういふ *Wortspiel* は旨く譯するわけに行かない。譯する爲めには殺して譯するより仕方がない。

66. *beguiled.....of herself* 本心を失はせて。

68. *the bitter letter* この *bitter* は前の *bloody* に對して用ひられた。

69. *After your own sense* お前が解釋したいやうにして、君の隨意に(罰しなさい)。

87. *pertains to feats* 手柄に關した。

95f. *that her motion* …… 自分の影を見てさへもはつとする、といふのである。 *motion* は *natural desires* だとも解られる。 *Schmidt* は *soul* の *movement* といふ風に解釋してゐる。

100. *perfection* *Desdemona* のやうな、何一つ缺點のない、完全な子が。

108. *these thin habits* そんな纔に身を被ふにしか足りないやうな著物。 *poor likely-hoods* *Of modern seeming* 昨日か今日か拵らへたやうな、手薄なだらう。

112. *affections* = *natural inclination*.

134. *most disastrous chances* 一か八かの仕事。

136. *Of hair-breadth scapes* きわどい命捨ひ。 *breach* 城壁の一方を破ぶつて城の中になだれ込む事。

142. *It was my hint to speak* *hint* は前の *cue* と同じ (*Johnson* の説)。自然の勢、そんな話をする廻り合せになつたといふのである。

153. *dilate* 一から十まで精しく話をする。

163. *made her such a man* この *her* は獨逸譯には、三格に譯してゐるのと、四格に譯してゐるのと、二通りある。どつちにとつても意味はとれる。三格にして、こんな男を自分の夫に持ちたいの意味にとる方がよささうである。

166. *woo* 心を動かす。

173. *Take up this mangled matter at the best* *mangled* は、地震などで押し潰されて、顔も形もくちやくちやになつたやうな人間を形容するに使ふ。此所では、もうどうせ黙目なんだから、いつその事あきらめたが可いぢやないか、といふ位の意味である。

176. *She was half the wooer* 半分はあの子の方から持ちかけた。

180. *Where most you owe obedience?* この中でお前が一番大事だと思ふ人は誰だ。

181. *I do perceive here a divided duty* 心が二つにわかれる、專一に一方に向ける事が出来ない。

189. *God be with you! I have done.* 勝手にするが可い、わたしはもう知らない。

195. *For your sake* お前がかういふ事をして見せたお蔭で。

199. *like yourself* 是は *ourself* の誤だらうといふ説がある。doge としてといふ意味だから複数をを用ひるといふのである。第二には、Brabantio の是までの話の口調を真似てといふ意味で、この *yourself* が使つてあるといふ説もある。第三には、*yourself* は、お前の不斷の口調でといふ意味で、今はひどく興奮してゐて平生の Brabantio ではなくなつてゐるが、さうでない平生の Brabantio の口調で話をしようといふのだ、といふのである。

202. *When remedies are past* やつた事の取り返しがつかないとなると。

203. *Which late on hopes depended* 幾分かは望みを懸けて居つた。

207. *her injury* 運命が辛くあたつて、自分がそのために受けた損害。

210ff. 一人が激昂してゐる時、片方は *intellectual* な話し方をして、それをなだめようとする。一方は反つてそれに腹を立てて、相手にしつぺい返しをする。かういふ對照は Shakespeare にはよくある例である。

210f. *So let the Turk of Cyprus us beguile* …… 笑つてさへすれば可いと言ふのな

ら、サイプラスを取られたつて、笑つてれば可い筈ぢやありませんか。

212. *nothing bears* 虚心平氣な時。

215. *That, to pay grief, must of poor patience borrow* 忍耐の力を借りていくらかでも悲しみを拂ひのけるといふやうな境遇。

219. Sir Joshua Reynolds の想像によると Shakespeare は、是を初めは、*troubled heart* は言葉では *cure* されない、とした。次に、*wounded heart* は耳では *reach* されない、とした。次いで、*bruised heart* は耳では *touch* されない、とした。最後にそれが、*bruised heart* は耳では *pierce* されない、と決定したのではないか、とある。

232. *My thrice-driven bed of down* 鳥の羽を集めて置いて風を送ると、軽いのは飛ば、それを三度も手敷を掛けて、選りに選つた軽い綿毛の床。

237. *I crave fit disposition* かたをつけてもらひたい。

238. *exhibition* = *allowance*. 月月の手當。

250. *downright* 無鐵砲な。

252. *quality*—*profession*. 女などの厭がつて近づかないやうな、軍人といふ職業。
258. *rites* “*Romeo and Juliet*” には *amorous rites* と使つてある。夫婦の語りひである。然しこの言葉には多少肉慾的な要素が含まつてゐるから、どうも少し *Desdemona* の性格に似合はない、従つて是は *right* の誤ではないかと言ふ人もある。さうすると是は、夫婦の離れずにゐる権利といふ事になる。
271. *My speculative, and officed instruments speculative* は *speculation, spectacle* などのやうに、昔は「見る」意味に用ひられた。此所の *speculative instruments* と *officed instruments* とを、心と體との二つに分けて解釋する人もあるが、自分は是らの二つを「眼」と解釋するが可いと思ふ。
283. *else Ottoman* 征討の辭令以外の。287. の *else* は「妻以外の」。
290. *delighted* 此所は *delightful* とか *delighting* とかではなくてはいけない所である。Shakespeare は *Active* と *Passive* とをよく混同して用ゐてゐたといふ人もある。従つて此所は、人を喜ばせる資格を天から授かつてゐたといふ意味である。

- 317f. *I would change my humanity with a baboon* 人間の皮をかぶつてゐちやそんな事は言へないから、俺ならまづ猿になるね。
- 319f. *I confess it is my shame to be so fond* まつたく俺は馬鹿に違ひない。
- 322f. *this in ourselves that we are thus or thus* 悲しいも嬉しいもみんな自分からだ。
375. *sated* あきぬ。
- 361f. *Wilt thou be fast to my hopes, if I depend on the issue?* *issue* は *Othello* と *Desdemona* との仲が悪くなるといふ、その結果をさすといふ説と、*Iago* の計略が旨く行く、その結果をさすといふ説とある。*Schmidt* の説は後者である。策の出來榮えを當にしてゐれば、大丈夫だらうか、の意である。*Wilt thou be* は、君はいつまでも助けてくれるかい、である。
376. *cuckold* 鼻をあかせる。
384. *Go to* 人を罵り、人をせき立てる時に使ふ。何をじれつたい、といふ程の意味。
391. *such a snipe snipe* は鴨のやうな小鳥の一種、こんな馬鹿野郎の意。

392. *But for* ためならばいざ知らず。

409. *I have it* よしよし、さうしてやらう。

Act II. Scene i.

10. *segregation* 木の葉の散るやうに散亂する事。

12. *chidden chide* は人を叱りとばす貌。

16. *molestation* 干涉、束縛、陰陽和合せざる貌。

20. *News, lads!* 大事件が出来た。

22. *halts* 進退きはまる。

36. *a full soldier* 申分のない軍人。

39f. *we make the main and the aerial blue An indistinct regard* 水や空、空や水と、見塚のつかなくなるまで。

49. *allowance* 人も許してゐる。

51. *Stand in bold cure* *Othello* の船がこの嵐に助かると信ずるのは、幾分 *speculation* の趣を持つてゐる。それだから *bold* といふのである。大膽にも自分はいか言ふを憚らないといふのである。

55. *shape* 想像で描き出す。

62. *paragons description* *description* に模範を興へる、即ち筆紙では悉す事が出来ないほどの、口では克く説明する事が出来ないほどの。

63. *quirks* 氣隨。 *blazoning* 楯に紋章を描く事。光彩陸離たる筆が如何に奔放の態をもつて自在に美を描くともこの意。

70. *clog* 進行の邪魔をする。

114. *a Turk* 穢多、乞食の類。

154. *frail* わけが分からなく。

160. *chronicle* 日記帳に書きつける (*Stevens* の説)。

167. *He takes her by the palm* あいつあの女の手をとりやがつた。 *well said* う
きへやへしる。

170. *gyze* 生捕る。

188. *labouring* 女の産氣に惱むをいふ。

207. *I prattle out of fashion* 無聞な事をしやべる。 *Note* 是は元來有項天になる
といふ意であるが、此所では、矢張りしやべるの意。

220. *directly* 明らか(に *emphasis* である)。

222. *Lay thy finger thus* 口の上に指を置き、黙つてゐる。また祕密を守れといふ意
味もある。

226. *prating* しやべる。法螺を吹く。

244. *loose affection* 下等な獸慾。

245. *slipper* へらへら所のなら。

247. *stamp and counterfeit advantages* 自分の利益になる事を無理に捏造する。

255. *Blessed fig's-end!* *Blessed* が聞いてあきれらあ、*Blessed* がちやんちやらおか
しうや。 *the wine she drinks is made of grapes* *Desdemona* だつて當り前の女だ、酒
を飲んだら酔つ拂んだら。

258. *paddle* 握る。

276. *minister* 興くる。

282. *come into no true taste again* 決して舊に復しない。

301. *stand accountant for* 責任がある。

302. *dial* 餌を興くる。

311. *whom I trash* 此所の *trash* は、獵犬の首に錘りをぶらさげて、あまり前の方
へ駈け出させないやうにする事。

Act II. Scene ii.

- 2. upon からしい。
- 3. importing 知らせる。
- 6. revels 騒いで楽しむ。 addiction 本来の心の傾向。

Act II. Scene iii.

- 7. with your earliest 次に convenience が略されてゐる。君の都合のつき次第、なるべく早くの意。
- 41. imprecation 顔がほてる事。
- 45. What, man! なんだ、君も男ぢやないか。一本、What man? となつてゐる。
- 51. With that=together.
- 54. turn'd the wrong side out 裏返しにする。
- 58. hold their honours in a wary distance 自分達の名譽を汚されない爲に、人から

離れて遠い所にしまつて置く。

- 59. The very elements=essence. 生粹。
- 71. clink 盃や Prosit をやる事。
- 83. drinks you Nの you は ethical dative で、意味を強めるだけである。 drink は、のみひなす。
- 91. worthy peer ぶらう王様。
- 100. Why 良うぢやないか。
- 103. No Nの言葉で、Cassio が酒に酔つた所を現はしてゐる。
- 112. by your leave 願くば。
- 124. platform=terrace. guardroom のある所。
- 145. ingraft 元來は接木をするといふ字である。此所では、根が生えたやうな意。
- 158. o'er the mazzard 叩きつけてひっくり返すぞ。 head over heels (ひっくり返す)といふ俗語もある。

178. *stirs next* せんとして動く。 *carve* は食卓で主人が肉を切り與ふの意味がある、此所では食物を興へるとか、恣にさせるとかの意。

179. *upon* するや否や。

187. *some planet had unwitting men* 星の影響で心を奪はれる。この時代は *astrology* の盛んだつた時分だから、かういふ事もいふのである。

193. *you are thus forgot* この句の前に *that* が略されてゐる。

196. *gravity* 落ちついてゐる事。

207. *self-charity* 正當防衛。

239. *fall* 上から下へ打ちおろす音。

256. *an example* はたの者の見せしめに。

263. *idle* あつて甲斐のない。

274. *false* あるまじきにあり、あるべきにない。

284. *slight* 取るに足りない。

322. *I have well approved it* 今迄の仕草でも分かるぢやないか。

328. *parts* 器量才學。

335. *any lay worth naming* 苟も賭と名のつく賭。

359. *play the god* 我我の運命を神が支配するやうに、相手を支配する意。

366. *Plies* ねだる。

374. *Tago* よりもものと *perfect* なものと *refine* された悪黨を書いて、善人だか悪人だか分らないやうな、表面だけを見ると立破な善人で、然も一面大悪人であるといふやうな性格をかいて見たら面白いだらうと思ふ。自分はさういふ人間が確に世の中にはゐると思ふ。

378. *cutgelled* なぐられた。

393. *billeed* 兵隊の言葉から來る、宿札の出てゐる所、宿の事。

401. *Dull not device* 折角の巧らみの角を折るまいぞ。

Act III. Scene i.

3. Why 何んぞ。
7. Ay, marry やらばや。
13. desires you, of all loves, to make no more noise with it あとは勿體ないからもう
止してもらひたす。

22. Dost thou hear 聞き、聞き。
27. entreats 受けたす。

Act III. Scene ii.

6. We'll wait upon your lordship お伴いたしませう。

Act III. Scene iii

- 21f. If I do vow a friendship, I'll perform it To the last article 私がお味方をする
と言へば、もう大丈夫です。
25. everything he does 行住坐臥に。
51. I have no judgement in an honest face やうなると私はもう人相を見る事が出来
ないといふ事になります。
71. mummering ためらふ。
72. so many a time 是は夫婦になる前の話である。
109. Too hideous 憚る。
131. Nay, yet there's more in this やう言つてしまへば、それつきりだが、もつと
何かあるに違ひない。
168. feed on 喰ひ込む。

169. *certain* 確に承知してゐる。
172. *O misery!* そりや堪らない。——前の言葉があつて、*Othello* のこの言葉は活躍する。*Othello* のこの言葉があつて、前の句が活躍する。
179. *the changes of the moon* 毎日少しづつ變化して行く事を、是で形容する。
181. *Exchange me for a goat* 俺は人間ぢやない、山羊だと言はれても可い。(山羊は情慾的な獣だとされてゐるのである。)
183. *exasperate* 下等な、*frivolous* な。*blown* = empty.
199. *secure* 眠つてゐるやうな貌。
209. *Why, go to then* 冗談ぢやない、そんなら氣をおつけなさい。
215. *dashed your spirits* あなたを不愉快にした。
220. *grosser* はつきりした。
227. *Long live she so!* さうだと大變結構ですわえ。
246. *scan* ぶりぶりぐる。

288. *napkin* = handkerchief. 今でも英國のある部分では、*napkin* を *handkerchief* の意味に用ひてゐる。

302. *Do not you chide* またお小言か。

330. *I did say so* *Othello* が登場する。*Othello* の顔には苦悶のあとがありありと見えてゐる。*Iago* がそれを見て、それ見た事かといふのである。

332. *drowsy syrups* 眠り薬。

346ff. *I had been happy, if……* 此所は一體に *poetical* に書いてある。然し若し是を寫實的に書いたら、是だけ熱烈な感情は現はれなかつたらう。

350. *plumed troop* 頭に羽を挿した兵隊。

355. *Pride, pomp* 門閥地位、それにつれてする派手な事。

364. *answer* 目的となる。*Isi come to this?* それほどまでに苦しんでいらつしやるのか。

366f. *the probation bear no hinge nor loop……* 是は *mixed metaphor* である。*hin-*

ge と loop とは丸で違ったものであるし、hang on がまた hinge にも loop にも、どっちにもかからない。一體 metaphor は新しいからと言って自慢にはならない。adequate なものが結局勝を占めるのである。然もそれは後世にならなくては分らない。

370. *Never pray more* いくら祈つて見たつて仕方がない、どうせ地獄へ行くんだ。

372. *Do deeds to make heaven weep, all earth amazed* Shakespeare は一體に bombastic な言葉を使ふ人である。その點で支那人とよく似てゐる所がある。

391. *I'll not endure it* 是は Othello の心の亂れてゐる所を現はしたと言へば言へない事もないが、然しこの言葉は、前に言つた言葉と辻褃が合はない。

452. *O, blood, blood, blood!* この重疊は前にもあつた。

461. *marble heaven* Hazlitt は Othello が自分の心を project して、天を marble と言つたのだと解釋する。自分の心が硬くなつてゐるから、天も同じやうに硬さうに見えるといふのである。

467. *execution* 働かせ。

469. *remorse* Pope は to obey を not to obey にとつて、remorse を pity の意味にとつた。然し remorse を conscience の意味にとつて、to obey と not を入れずに讀む方が可い。

Act III. Scene iv.

1. *swear* 叱りつける時、又は目下の者にもを言ふ時に使ふ。

9. *lie* といふ言葉をいつまでも追求して行く所は、いかにも poor である。

13. *to lie in mine own throat* 當り前より烈しい嘘をつく。Shakespeare の慣用語である。

14f. *be edified by report* 人の話を聞いて自分が物知りになる。

16. *catechise* Desdemona が edify などと大袈裟な言葉を使ったので、glown の方も負けない氣になつて、こんなむづかしい言葉を使ふのである。

25. *Believe me* 私は確にさう思つてゐる。
 30. *Who, he?* 思ひもよらぬ貌。
 31. *humours* 体内を廻つてゐる血。この血の工合で喜んだり悲しんだりするのだといふ風に考へられてゐた。

36. *moist* 悪い意味がある。

38ff. *his passage* には一種 *pathetic* な所がある。Hamlet が Ophelia に向つて言ふ、奇警なやうな凄いやうな辻褃の合はないやうな言葉と似てゐる。然し感じは丸で違ふ。殊に Othello のこれらの言葉が、Desdemona をおびき出す爲に言はれる言葉であるといふ事を知ると、この言葉の持つてゐる面白味は、急に消え失せてしまふ。この意味で drama には返す返すも *motive* の選擇が必要である。

55ff. *That handkerchief* …… これは Othello が初め Desdemona にハンケチをやる時に言つた事であるか、それとも今初めて言ふ事であるか、其所がはつきりしない。今初めて言ふのなら、是は甚だ面白くない。

67. *perdition* = ruin.

69. 是で見ると、ハンケチがこの drama の大趣意で、悲劇はハンケチに始まつてハンケチに終るものらしくも見える。然るに全體から言ふと、ハンケチは單なるツマのやうなものであるに過ぎない。従つて Othello がハンケチの事をこのやうに大袈裟に言ふのが、あまりに不自然に思はれて来る。Othello の心持の方から言つても、*motive* がかういふ風に二つに分れて來ると、Othello の心の状態が矛盾して來るのである。ただこの話を、全體から截り離して、是だけとして取り上げて見ると、いかにも *romantic* で面白い。

72. *In* まかせじ。 *fury* = excitement.

77. Desdemona のこの言葉は、Othello には、そんな事なら人にやらなければよかつた、と言つたもののやうにもとれる。それ故すぐ訊くのである。

82. *It is not lost; but what an if it were?* Desdemona は夫の愛を失ふ事を恐れてゐる。それだから無理に嘘をつかせられるのである。

85ff. 是より以下の會話は、藝者と旦那との會話のやうな感じである。是までの會話は、

夫と妻との會話である。その理由はよくは分からないが、何となくさういふ氣がする。

86. 此所の Desdemona が、話を外らせようとしてかういふ事を言ふのだと解釋するのは、あまりに Desdemona の *innocency* を傷けるものである。Othello が怒つてゐるのは自分をのける爲だと Desdemona が思ひ込んで、さうしてかういふ事を言ふのだと見るべきである。

95. *The handkerchief* 1 是はどいふも *artificial* である。是が假令 *realistic* であつたとしても、くどすぎる。

118. *clothe me in a forced content* 仕方がないと諦める。

120. *ahms* 補助。

127. *For my free speech* 勝手次第にしやべつたから。

136. *Something of moment* 容易ならざる大事。

149. *unhandsome warrior* Cassio の爲に心配してやるのに、自分の意志を通す爲に、攻撃しないでも可い所を攻撃するから、それで下手な勇者といふのである。

157. *will not be answer'd so* 辯解したつて安心するものぢやない。

158. *They are not ever jealous for the cause* わけがあるから焼餅を焼くわけぢやない。

174. *O weary reckoning!* 時計を數くる身になつていらんなさう。

182. *Throw your vile guesses in the devil's teeth* ない腹を探るなんてのは、魔がさしたんだ、そんなものは返しておしまひ。

184. *That* と思ふのは。

Act IV. Scene i.

1. Deighton は *What* 以下を Othello の言葉だらうと言つてゐるが、それは別に *authority* を持つてゐるものではなかつた。然し Deighton の言ふやうにすれば、前後の連絡がなだらかにはなる。さうしないと、とにかく此所は工合が悪い。

14f. *She is protectress of her honour too* …… Othello は逆上してゐるにも拘はら

す、理窟を言つてゐる。

21. 烏を不吉な豫言をする鳥とするのは Rome 時代からの迷信である。
 23. *That's not so good, now* 是は又あまりに柔らかな言葉である。もう少しどうかしたら可からう。

25. *as knaves be such abroad* 世の中にはかういふ人間もありますからね。

26. *importunate* 無理に頼む、いろいろ工夫を廻らす。

27. *dodge* 愛に溺れる極、馬鹿になるやうなもの。

28. *Convince I* 女を動かす。 *supplied* 女の言ひなり次第になる。

29. *blab* くさやべさやしやべりたがる。

36. *they belie her* ありもしない嘘をつく。

37. *confessions* Cassio がそんな事を自白したのか。

38. *To confess, and be hanged* この言葉は悪口などによく使はれる。

41. *shadowing passion shadowing* は、ぼんやり形が現はれて来る事である。 *sha-*

dowing passion はやういふ際に経験する *passion*. 蟲が知らせる。

43. *Pish!* あいっ、屁退し。

44. *Othello* が氣絶するのはをかしい。然し是で *Othello* が *Desdemona* を殺すやうになる *motive* が如何に強いかを現はす事にもなる。それにしても、少し劇しすぎる。

61. *Dost thou mock me?* *Iago* の言葉が角が折れでもしやしなかつたかと訊いたやうにも聞える。それだから *Othello* が、お前は俺を *mock* するのかと言ふのである。

62. *like a man* 男らしく。

65. *And* 言ひ換へれば。 *a civil monster* *monster* に *civil* といふ字をくつつけた所が、一寸 *wit* のある所である。

67. *yoked* 妻といふ厄介ものをくくりつけられた。

68. *May draw with you draw* は *yoked* に照應する。あなたとおんなじだの意。

70. *your case is better* あなたのは分かつてゐるんだから、ましですよ。

75. *O, thou art wise; 't is certain* お前は物の分つた奴だ、疑を容れる餘地はない。

——この言葉は、Iago の今の言葉と連絡がない。前の話を受けるのだらう。

80. *laid good 'scuse* いい加減な言ひわけをして。

81. *anon* も少しで。

83. *Jeer's* 嘲弄。 *gibes* 輕蔑。

90. *Dost thou hear, Iago?* いいか。——普通は自分の言ふ事が相手に徹底しないやうな時に、念を押す時に用ひる。此所では *emphasis* である。

92. *most bloody* ひどい敵討をしてやる積りだ。

94ff. 前に Bianca を一寸點綴して Cassio と Bianca との関係を示して置き、あとで Iago をして是を利用させる。この *situation* の作り方は、非常に巧妙である。斧鑿の跡をどめず、少しも無理がない。

97. *as 'tis the strumpet's plague* あんな稼業をしてゐる者の弊として。

102. *construe* 解し易くする。

103. *light behaviour* 浮かれ調子。

112. *if aith* 實のところ。

114. *Do you hear, Cassio?* ねえ、さうぢやないか、君。

116. *She gives it out* あいつはかう言つてゐる。

122. *bear some charity* やう一二束三文に言つてくれるな。

124. *cry* 評判。

128. 情婦に對する *endearment* として用ひられる。

136. *by this hand* 確に。

140. *lolls* 凭り添ふ。

142. *plucked* ひっぱる。

147. *fitchew* 下等な女などを喩へて言ふ。

153. *A likely piece of work* よくもそんな事が言へますね。そんな事言つたつて駄目ですよ。嘘も好い加減にするが可いや。

159. Bianca の持ち出したハンケチがよく見えなければ、芝居にならない。芝居にな

らなければ、ハンケチを出して来た甲斐がない。

190. *that's not your way* あなたにも似合はない事です。

195. *She's the worse for all this* それだけの器量を持つてゐながら、そんな事をするんだから、猶悪いんだ。

204. *Chop her into messes* あの女を脛に刻む。

239. *Are you wise?* 芝居では是を Iago の言葉にして、Othello をなだめるやうにして演つてゐる。さういふ風に解釋してゐる人も随分ある。然し *authority* はない。是をこのまま Othello の言葉としてとれば、人前をも憚らずにいろんな事を言ふ、馬鹿な奴だ、といふ意味になる。

252. *Out of sight!* 見るも穢らはしい。

Act IV. Scene ii.

3. *Yes* 是は満足せざる貌、いいや。

12ff. *Emilia* は少し蓮葉に書かれてゐる。それだから *Emilia* は随分猛烈な事をすばすば言ふ事もある。

14. *Remove your thought* そんな考はよしておしまひなさい。

21. *subtle* 一筋縄ではいかない。

26. *What horrible fancy's this?* なんですねえ、氣味の悪い。

27ff. *Othello* が *Desdemona* には答へずに、*Emilia* に口をきくのは面白い。潜勢力。

33. *But not the words* どうして可いかわからない。

34. *Why* 分かつてゐるぢやないか。

36. *damn thyself* 自分で地獄へ落ちちまへ。

37. *Lest…… Should fear* 猶豫するといけないから。

39. *Swear thou art honest* *honest* なら *honest* だと言つて見る。

43. *Alas the heavy day!* ああ困つたものだ。

66. *I hope my noble lord esteems me honest* 私が御不興の種になつてゐるのではないのでせう、の意を含む。
68. *That quicken even with blowing* quicken は生きる、blowing は蠅が卵を産みつける事。卵だと思つてゐると、もう蠅になつてゐる、といふのである。
82. *Impudent strumpet!* けしからん奴だ。
93. *You, you, ay, you* お前だ、お前だ、よく分かつたね。
95. *keep our counsel* 視た事聞いた事を人にいふな。
96. *conceive conception* は *evil idea* の意に用ふる事がある。此所の *conceive* に悪い意味が這入つてゐる。
105. *But what should go by water* 涙で現はすより外は、の意である。——此所の *Desdemona* の言葉はもう少し真率でありたかつた。
119. *Am I that name, Desdemona* は *whore* といふ言葉を口にするのが厭だから、それで *that name* といふ。

136. *heaven pardon him!* 天に許されれば幸だ。
150. 是は如何にも奥様らしい態度である。
160. *Comfort forswear me!* いかなる天罰を受けても構はない。
161. *And his unkindness* 他人のでもだが自分の夫の。
164. *addition* 評判、稱號。
171. *stay the meat* 飯を喰はずに待つてゐる。
- 180f. *nor am I yet persuaded to put up in peace* 應分の返報をする氣だ。
186. *You charge me most unjustly* charge は言ひがかりを言ふ事である。難癖をつけるにも程がある。
190. *avotarist* 祈禱に浮身を窺して一向専念に神佛に仕へてゐる人、仙人のやうに俗事に遠ざかつてゐる人。
195. *man* 貴様。
- 196f. *It is very scurvy* けしからん。

204. *You have said now* 思ふ存分言つたね。それほど言や澤山だ。
211. *just* もつともな。
215. *is not without wit and judgement* まんぢらの無分別でもない。ごもつともだ。
219. *show* 使つちまぐ。
230. *wherein* *Othello* を餘所へ遣らないやうにする策の内だ。
233. *remove* には殺すといふ意味があるが、*Roderigo* はこの言葉をそんな深刻にとらなうから、*Iago* の言ふ事が分からない。
238. *sups* 會食する。
241. *fashion* 拵らうてやる。

Act IV. Scene iii.

1. *I do beseech you, sir, trouble yourself no further.* 御迷惑をかけては濟まんから、どうか歸つて下やう。

2. *O, pardon me* 相手の命令に逆らう形になるから、それでかういふのである。
4. *Your honour is most welcome* どう致しまして、よくいらしつて下さいました。
7. *on the instant* すぐ。是は今日の英語ではあまり言はない。
8. *dismiss* そばに置かないやうにしる。
9. *look it be done* 命令通りにしる。

11ff. *Desdemona* の性格は、孔子流の教育を受けた、日本の姫御前によく似てゐる所がある。腰元の *Emilia* のやうなものも、歌舞伎芝居にはよく出て來さうである。例へば八重垣姫と濡衣といったやうなのがそれである。この點で *Shakespeare* が *universal* と言はれるのも無理はない。*Shakespeare* の作品を悉く讀んで、中に出て來る性格を幾つかの *category* に分けて、この部分は日本人には丸で分らないが、この部分は日本人によく當て笥つてよく分かるといつた風に、細かに研究して行つたら面白いだらうと思ふ。外國のものは、風俗習慣が違ふ所から、日本人にはどうも呑み込めない所が多い。貴族の夫

人が夫をつかまへて、馬鹿野郎なんて叱り飛ばす所があるが、日本人にはさういふ夫人は到底思ひ浮べられない。——もつとも考へて見ると、categories に分けて見るなんて仕事も、無駄な事かも知れないとも思はれる。“The Principles of Western Civilization”の著者 Kidd などは、百年後の事を考へてやる人は決してゐないと言つてゐるが、自分の考へでは、百年後どころか十年後、十年後はおろか一年先の事を心得てやつてゐる人もきつと少ないに違ひない。戦争をして樺太を取つた。取つたのは可いが、戦争をする前から、こんな事になると見込をつけて、さうして戦争をしたわけではない。やつたあとで、俺はかうなると思つてゐたと言つて、威張る位のものである。とにかく人の心といふものは、刻刻に移つて行く。従つて風尙も刻刻に移つて行く。風尙が變れば習慣も變る。今日こんなものが日本人の性に合ふと言つたところで、明日になつて見ると、もう變つてゐるかも知れない。さういふ風だから、今更 categories を作つて研究して見たところで、それも結局は徒勞に終るかも知れない。

18. *I would you had never seen him!* あんな方にはいつその事お會ひにならなかつ

た方がよござんしたねえ。

24f. 人間は一寸した事から急に妙に sentimental になるものである。然しそれも、少しでも程度を過ぎすと、馬鹿らしくなる。此所の Desdemona の言葉にも pathetic な所があるが、是も言ひ方、考へ方で、反つて妙なものにもなる。あぶない所である。

25. *Come, come, you talk. Come, come* はたしなめる貌。下らない事をおつしやるもんぢやありませんの意。

33. *dispatch* 著物をぬがしつ。

38ff. 是は暗に Othello との contrast になつてゐる。

53. *that's not neat* その次の句が落ちてゐる。

59. *'Tis neither here nor there nonsense.*

90. *peerish* しまらなく。

92. *in despite* 憎らしくなつて。

Act V. Scene i.

- 2. rapier けんさくしてゐる、突く刀。
- 11. ruddy …… almost to the sense あまりこすつて痛くなる、居ても立つてもゐられなくなる。
- 29. It is even so 是は Othello の前の臺詞、Iago keeps his word にかかる。even は just である。
- 32. hast such noble sense 大事に思つてゐる。
- 43. let's think it unsafe …… もう少し人の來るのを待ち合せて行く事にしよう。
- 47. in his shirt 寝間著のままに。weapons 用心棒。
- 54. I am spoil'd, undone by villains 俺は片輪にされた、取り返しのつかないやうにやつつけられた。
- 78. O notable strumpet! 白じらしい女だ。may you suspect 見當が附ないかい。

- 79. mangled 突きささいなんだ。
- 95. 好い所でお目にかかつた。
- 98. O, that's well said 丁度好い所へ持つて來た。
- 101. Save you your labour 手をつけてはいけない。餘計な事をするな。
- 104. out o' the air out of doors の反對。

Act V. Scene ii.

始の monologue は或意味から言ふと極めて不自然である。然しその書き方に於いては、極めて real である。書いてある事が生きてゐる。real に書いてありさへすれば、自然、不自然は大して問題にはならない。唯“Othello”は四大悲劇の一とまで呼ばれて、馬鹿に評判の高い戯曲ではあるが、讀んでしまつて、どうも愉快な感じがしない。おなじ人殺しをするのでも、“Macbeth”の方だと、あとに残るものは、大して不快な感じはなくて、

ただ凄しい感じだけである。是は *art* の罪であるか、それとも材料の罪であるか。さういふ事を研究して見るのも、一寸面白い事であるに違ひないと思ふ。

5. *monumental* 彫刻用の。
6. *betray more men* 自分を欺く以上、他人をも欺く。
11. *pattern* 標本になるもの。
15. *Tu smell it on the tree* 木に咲いてゐるうちに、香ひを嗅いで置かう。
21. *cruel tears* Johnson は是を、涙は出ても許さない、悲しくはあるがその悲しみにまけずに *justice* を行ふ、といふ意味に解釋してゐる。然し自分はこの *cruel* を、自分には *sweet* の意味であつて、こんな穢らはしい奴を殺すにも、涙は出るといふのである。
24. *Will you come to bed, my lord?* あなた、おやすみになりませんか。
30. *Othello* の言葉は、相手の言葉に耳を假さずに言はれる。自分が前に言つた言葉の續きを言つてゐるやうなものである。

60. *with such general warranty of heaven* これだけは他人を愛しても可いと天が許してゐる、その範囲内で。

63. *perjured woman* しんをきるやうな女。

75. *stomach* = appetite of revenge.

91. *'Tis like she comes—it is likely that she comes.* *O* she は勿論 Emilia である。

113. *then murder's out of tune* それぢや調子の外れた人殺しだ。

114. *And sweet revenge grows harsh* *O* の *sweet* も *harsh* も前の *tune* にかかる。
sweet な *tune* が、*out of tune* になつて、*harsh* になるといふのである。Revenge is sweet. などといふ事は、今日でも言はれてゐる。

115. *O* の *Desdemona* の叫び聲を聴く所は、役者のやり方、又は讀者の讀み方によつて、さまざま利へ。

117. *Out, and alas!* *O* の *Out* は *alas* を強めるためだけに用ひられたもの。

118. *Help! help, ho! help!* 是まづは Emilia は Desdemona が殺されつつあるものと想像して、聲を立てるのである。次の O lady, speak again! は、寢室の curtain をかかげて、殺されてゐる Desdemona を見て言ふのである。
124. *how should* あり得るだらうか。あるわけがない。
131. *Thou dost belie her* 嘘をおつきなさい。
137. *extremity* 人の命をあやめるやうな事。
146. *slime* ぬり泥のやうな汚いもの。
149. *made mocks with love* Love の虚に乗じて苛い目に遭はせた。
154. *he lies to the heart* まづかな嘘つきだ。
155. *She was too fond of* 可愛がりすぎたのがお氣の毒だった。
168. *That men must lay their murders on your neck* ひとから罪を脊負はされるやうな事さ。
189. *I think upon 't* 居ても立つてもゐられない。

190. *I thought so then* 今更始まつた事ぢやない。先からさうだらうと思つてゐた。
205. *a desperate turn—a desperate service. One good turn reserves another* と
いふ諺がある。
211. *gratify* 褒美をやる。
212. *recognizance & pledge* も、共に token の意味。
220. *cry shame against me* みつともないから黙れと言つても。
221. *Be wise* 分別しろ。荒立てたつて仕方がないぢやないか。
224. *by fortune* 不圖。
226. *More than indeed belong'd to such a trifle* ハンケチのやうなつまらないものにしては。
240. *But kill him rather* 強ひて出ようとするなら、殺してしまへ。
241. *I am not valiant neither* 俺は勇氣を一緒になくしてしまつた。
243. *But why should honour outlive honesty? honesty* をなくしてしまつた以上、

honour をあとに生き残らせて置く必要はない。もうなんにも要らん。

246. *die in music* 歌ひながら死ぬ。

249. *Emilia* は初めの内は善人だか悪人だか分からない。それはそれでも可いが、*Demon* が大變目をかけてやつたといふやうな所でも書いてあるとよかつた。

251. *Spain* は名刀の出来る國である。其所に氷のやうに冷たい水の流れてゐる河がある。その河の水に灼熱した綱鐵を浸けて、刃を鍛へるのである。

255. *Look in upon me* 顔を出してくれ。

259. *I have seen the day* …… した事もある。

267. *it is lost fear* 恐れたつて何の役にも立たない。

268. *Man but a rush against man* は「装ふ」「擬する」。葦を鎗に擬して突きかか
つてゐる。

271. *at compt* 浮世の借金を天で拂ふ時、即ち最後の審判を受ける時。

275. *O cursel, cursel slave!* 情ない事をした。 *Whip me* 答をあてて、突き

落してくれ。

276. *From the possession of this heavenly sight!* こんな神神しい姿を眺める資格がないんだから。

278. *liquid fire* 地獄の火。どろどろに溶けて流れてゐる火。

282. *That's he that was Othello* 今は *Othello* とは名乗れないが、昔 *Othello* と
つた男だ。

284. *I look down towards his feet* 足を出して見ろ。(Devil は蹄を持つてゐると言
はれるから)。

287. *I am not sorry neither* 死なない方が好い氣味だと思ふ。

295. *Did you and he consent in Cassio's death?* あなたと相談の上で *Cassio* を
殺さうとしたのだと申しますが。

303. *Torments will ope your lips* 拷問にかけても口を利かして見せる。

315. *belike*—perhaps. *in the interim* 送らないうち。

321. *O fool I fool I!* = I am a fool!
323f. *made him Brave* 喧嘩を賣らせた。
333. *close prisoner* = as close prisoner.
336. *Soft you* 暫く待つてくれ。
340. *extenuate* 軽くする。
344. *Perplex'd* 悩亂られる。
345. *base* = ignorant.
346. *subdued eyes* 眼をへらまされて。
347. *melting mood* 涙を流すやうな気分。
352. *traded* 悪口を言ふ。
353. *circumcise* 1 dog 割禮は Jew などが受ける。此所では *devil* などといふやうな言葉と同じ意味。
355. *period* = end.

- 358f. *This did I fear, ... For he was great of heart* の *For* は *fear* を説明する。えらい人だからこんな死に方をしやしないかと思つてゐた。
362. *the object poisons sight* 見ても胸糞が悪くなる。
364. *fortunes* 財産。
366. *censure* = judgement.

漱石先生のてれ隠し

漱石先生がまだ大學で講義をしてゐた時分の事である。ある日先生が、自分の講義を懐手をして聽いてゐる學生を、ひどく叱りつけた。然るにその學生は、實は片腕のない學生で、懐手をするもしないもなく、さうしてゐるより仕方のない學生であつた。はたの學生が、その事を先生に注意した。すると先生は、僕はない智恵を絞つて講義をしてゐる。君だつて、ない腕ぐらゐ出して聽いたつて可いぢやないか、と言つた。

——是は先生の逸話として、先生歿後だいぶ有名になつた話である。大抵な人は、是を知つてゐるのではないかと思はれる。然しこの話には、まだ先きがあつた。それを私もついこのごろになつて聽いた。それは、その、手が無いのだといふ事を、はたから先生に注

意した學生が、先生のこの言葉を聽いて、夏目さんといふ人も随分ひどい人だと感じ、それを外の人に言つたといふ事である。

この學生は、もうだいたい、ぶ前に死んでしまつた。私よりも一年上で、私もよく知つてゐる學生である。正直で、おとなしくて、それでなかなか頑固な所もあつて、私の好きな男だつた。その男が、先生の事をさういふ風に感じたまま、死んでしまつたのだといふのだから、私は何か情ないやうな心持にならざるを得なかつた。一體何所をひどいと感じたものだらうと、私にそれを教へてくれた友人に訊き直すと、いくらで、れ隠しをいふにしても、これはあんまりひどすぎるといふのが、當人の主意らしかつた、といふ返事であつた。是を聽いて、私は更に遣る瀬がないやうな心持になつた。

自分の仕事に眞面目で忠實で、然も禮儀の正しかつた先生は、自分の講義を懷手をして聽く、學生のだらけ切つた態度を、恐らく憎むべき態度だと思つたに違ひない。然し先生は不斷教場で、無闇に小言などをいふ先生ではなかつた。先生は、暫らくの間は、その不愉快を我慢して、相手が懷手をやめる事を待つてゐたに違ひない。然し相手は手がないのだから、元より懷手のやめやうはなかつた。さういふ事とは少しも知らず、既に一つの方角に傾斜し始めてゐた先生の心が、いつまでたつてもその懷手をやめない學生を見て、とうとう爆發し、終にその學生を叱りつける行動を取らせるに至つた事は、まつたくやむを得ない事であつた。

然しそれとともに、純粹で愛に充ちてゐた先生が、その學生には手が無いのだと聽いて、卒然として自分の行動を悔い、相手に對して實に濟まない事をしたと思つたに違ひない事も、また想像に餘りある事である。——それならば先生は、この際翻然として、相手に謝罪するがよいではないかといふのが、恐らくそのはたの學生の意見であつたらう。然し先生はこの際、それが出来なかつたに違ひないと思はれる。なぜなら、この時先生の心の中には、相手に對して氣の毒に思ひ、實に濟まなく思ふ心の傾斜とともに、それとは丁度反對な、相手を不都合に思ひ、相手を不愉快に思ふ、他の心の傾斜が、既に相手を叱りつけなければならなかつたほどの、急勾配をもつて、動き出してゐたからである。

先生はきつと淡泊に、相手に謝罪したかつたのだらうと思ふ。然し先生の内面をいへば、

この時先生は、先生の中で猛烈な勢力をもつて衝突したこの二つの急傾斜のために、二つのものが折衝され、決算され、協商が纏まるのでない限り、一つの傾斜だけに身を委ねる事の出来ない、特殊な状態に置かれてゐたのである。然もこの際先生が、相手に對して何か言はなければならなかつた——黙つてゐる事が出来なかつたのだとすれば、先生は、この二つの心の傾斜のどちらからも身を翻して、無理にも第三の立場をとるより外に、道はなかつた筈である。それだから先生は、相手を見無視するとともに、自分自身をも無視し、世にも不合理な、無理な事をいふ事によつて、自分も笑ひ、相手にも笑つてもらはうとしたものに違ひない。——この笑ひには、かなり複雑な心持があつた。然もこの笑ひには、深い謝罪の、デリケートな和解の、ひそかな申し出しがあつた。

然しこの申し出しは、多くの人によつて理解されないやうに見える。先生に注意した學生の純粹は、或はこの笑ひの故に、眞面目なものを不眞面目に取り扱ふものとして、先生をひどい人だと感じたものかも知れない。然し、多少でも先生の人間に觸れた事のある人なら——先生の人間に觸れるまでもなく、往往にして人は最も不合理な事、もしくはその

場合に最もふさはしくない事をいふ事によつて、最も濃厚な情愛を相手に注ぎかけるものであるといふ事を心得てゐる人なら、この際ほど先生が眞面目に、相手に濟まない事をしたといふ感情を吐露した事はないといふ事を、すぐにも感じる事が出来るはずであつたと思はれる。勿論此所には、強ひて言へば、先生の江戸つ子の臭ひや、俳人の臭ひなどが、出てゐなくもないのである。然したとひ此所にさういふ臭ひがあつたとしても、それは、先生がひどい人であるといふ事とは、およそ關係のない事だつたのである。（『大阪朝日新聞』——九・四・二八）

夏目先生のこと

あさつてはもう先生の十三回忌になる。このごろいろいろ先生の事を思ひ出す事が多い。先生の事を思ひ出すと、時々私は、私が先生の前であぐらをかいた時の事を思ひ出す。

私が先生の所へ初めて行つて話をしてゐるうちにあぐらをかいたといふ話は、いつだつたか『漱石の思ひ出』の中ですつばぬかれて以來、だいぶ有名になつてしまつた。然しあの『思ひ出』は一體、觸れて然も悉し得ない憾みがある。私は此所にあの時の事を、もう少し精しく書いて置きたいと思ふ。多少きまりが悪くなくてもないが、それも今となつては、寧ろ懐かしい思ひ出である。

當時私は大學へ這入りたての學生であつた。私の従兄がロンドンで先生と暫く一緒の下

宿にゐたといふ縁故で、前から紹介してやらうやらうといふのを、大學に這入つてからの事にすると言つて延ばしてゐた私は、九月にいよいよ大學に這入る事になつたので、先づ従兄に先觸をして置いてもらつた上で、先生の千駄木の家へ罷り出た。

その時先生からどんな話を聞いたか、こつちからどんな話をしたか、そんな事は、今一切覚えてゐない。覚えてゐるのは、先生がオリヅがかつた鼠色の、細かい縞セルの單衣を著てゐた事と、先生のからだつき全體がなんとなく懶さうに見えた事と、それにも拘らず先生の眼が爛爛と光つてゐるやうに感じられた事ぐらゐなものである。

然し、ともかくも私は、先生の前にちよこなんと畏つて坐つてゐながら、先生に話をし、先生から話を聞いた。

今でもあまり行儀の良い方ではないが、その時分の私は、とても今ほどもちやんと坐つてゐる事は出来なかつた。私は、先生の前に坐つてゐながら、段段自分の脚がしびれて来る事を感じ出した。

當時の私といへども、先生長者の前へ出て、猥に膝を崩す事が失禮である位の事は、承知してゐた。それどころか、現實に侍の妻として少くとも十四五年は生活して來た筈の、祖母から教育された私は、當時の學生としては、古風な禮儀といふ事に比較的神経質な方であつたかも知れなかつた。それ故私は、暫らくの間は、そのしびれて来るのを、じつと我慢してゐたのである。それから私は、膝小僧と膝小僧と喰つつけて見たり放して見たり、左の足先を右の足先に重ねて見たり、右の足先を左の足先に重ねて見たり、頻にもちもちし出した。然し、酸つばいやうな澁いやうな擦つたいやうな脚の感覺は、次第に昂進して行く計りであつた。それが私をどぎまぎさせた。——脚のしびれて来る事に當惑したのは無論の事であつた。然し、それよりもつと困つた事は、何かしら先生に受け答へはしてゐるものの、脚の方に計り氣をとられて、實は私が先生の言つてゐる事を、少しも神妙に聽いてゐない事であつた。それが私を、私が故意に先生を騙してでもゐるかのやうに、不安にした。

その時私は考へた。膝を崩す事は悪い事かも知れない。然し、膝を崩さずにゐるために、先生と上の空で觸れ合つてゐるのは、もつといけない事である。その上、かういふ先生の

前へ出る以上、遠慮だの氣兼ねだのは投げ出してつて、自然に有體に振舞ふ方が可いのではないか。第一、膝を崩さない爲めに自分が苦しんでゐる事は、先生にも分かつてゐる筈である。なんでも分かつてゐる筈の先生の前で、こんなつまらない事で苦勞するのは、馬鹿馬鹿しい。是はどうしても、思ひ切つて、あぐらをかいちまう方が可い。

私は「失禮します」と言ひながら、忽のうちにあぐらをかいて了つた。先生は平氣な顔をしてゐた。

然し、あぐらをかいて見ても、私の心持は少しもほつとしなかつた。是は、今から考へて見ると、あぐらをかくといふ事にも、當時の私の心持の上に、可也の無理があつたせゐに違ひないと思はれる。偽善的精神に反抗するものとしての露惡的精神といふやうなものが、當時の私の心に活らいたものかどうかは、はつきり分らないが、兎も角もこのあぐらには、意識的に多少の擬勢が加味されてゐた事は、争はれない。さうして、その意識的な擬勢が加味されてゐるといふ事の意識が、私を一つの不安から他の不安へと導いて行つたものだらうと推測される。とにかく私は、あぐらをかく事によつて、脚がしびれる事の

不安からは免がれる事は出来たけれども、更に新たな、なんとも名狀する事の出来ない、不思議な不安に囚はれ始めたのである。

私は到頭居たまれない心持で、こそこそ遁げ出すやうに、先生の許を辭した。

私は、その事がいかにストライキングな事として先生に受けとられたかなどといふ事は、その時もその後も、夢にも想像しなかつた。

ところが、それから幾月もたつて、私自身さへもその時の事を忘れて了つてゐた時分の事である。先生は大學の教壇に立つてシェイクスピアの講義をしてゐたが、不圖何かの機會に、我我の叩き込まれた古風な道徳は、既に諸君の前には殆んど何の權威もないものになりつつある、といふやうな事を、話し出した。先生のシェイクスピアの講義は、講義そのものも勿論面白かつたが、それとともにシェイクスピアの描いた人物や使つた言葉から引き出される、先生の「Fantaisie Impromptu」が亦素晴らしく面白かつた。それで私は、いつでも先生の時間には、正科のフレンチの時間を休んでは、英文科の教室へもぐり込んでゐたのである。今日もまた面白い事になつたなと思ひながら、耳を澄ましてゐる

と、私の家に來る學生で、私の所へ初めて來た癖に、いきなりあぐらをかいた男がある、と言つて先生は一寸言葉を切つた。私は、はつとした。

なるほど先生のやうな禮儀正しい人から見たら、此間の私の振舞は、まつたく無教育な田夫野人の振舞に見えたに違ひない。已むを得ないからあぐらをかいたには違ひないが、かいてしまつたあとでもやつぱり心持が落つかなかつたのは、先生のかういふ批評が、先生の頭から此方へ放射されないまでも、自分の頭の中にもぼんやり動いてゐて、それが非難とも批評ともつかない、朦朧とした反省になつて自分に活らき掛けたものに相違ない。どうもとんでもない、取り返しのつかない事をしてつたものだ、私は文字通り穴の中へ這ひ込みたい氣になつた。然し先生は、濟した顔をして、先きを續けた。

——かういふ男の振舞は、我々の古風な道德から見ると、先生長者に禮を失するのだから、決して良い振舞だとは言はれない。然し必ずしも過去の道德の羈絆を受ける必要のない若い諸君から言へば、ちやんと坐つてゐられなくなつたからあぐらをかき、是ほど自然な事はないとも言へるだらう。是は諸君の道德の立てやう次第で、どうにでも評價され得

る事である。然も諸君は今、自分自身の道德を建設しなければならない地位に置かれてゐるのである。ただ然し、過去の道德が諸君を支配する力を失つて、諸君が自分自身の道德を建設しなければならぬ地位に置かれてゐるといふ事は、諸君があらゆる義務と責任とから解放されて、自恣放埒に振舞ふ事を許されるといふ事ではない。否、自分自身で自身自身の道德を建設するといふ事は、過去の道德を生れながらに受とつてそれに隨順して生活するよりも、遙に嶮難な道がある事である。そのためには先づ諸君は、自分自身に對して十分の責任を持たなければならぬからである。——さういふ意味の事（このイデーは後に『野分』の中の道也先生の演説の中で敷衍されてゐる）を言つて置いて、先生は又『オセロ』か何かに歸つて行つた。私はその日一日、顔をあげてある事が出来ないやうな氣がした。

その後の木曜の晩に、先生の所で私は、此間は先生は随分ひどい、と先生に言つた。私は聽いてゐて、顔から火が出るやうな氣がしました、とも私は言つた。すると先生は、氣の毒さうな顔をして、あ、あれは君だつたのか、僕は誰だつたか忘れてゐたよ、と答へた。

私は、それぎり、二の句がつけなかつた。

先生は實はおぼえてゐたにも拘らず、私に氣の毒なので、誰だつたか忘れてゐたと答へたのかも知れない。さういふ技巧は、世間にはよくある事である。然し少くともその時の私には、先生は、それが誰れであつたかを、ほんとに忘れてゐたものと思はれなかつた。殊に先生は、いかなる點でも、無意識の場合とはかく、決して嘘をつかなかつた。又つくまいと心掛けてゐた人である。いくら氣の毒だといつて、もし覺えてゐれば、向きつけに、私にそれを言はない先生ではない。勿論その後は折にふれては、なにしろ初對面にあぐらをかくやうなやつだからと、私を目の前に置いて、先生は頭ごなしにこなしつけてゐたが、然しその時は先生は、ほんとに忘れてゐたに違ひないと、私は今でも思つてゐるのである。

さうして其所に先生の、印象の受とり方の一つの特徴が現はれてゐるやうに、私には思はれる。先生は、箇箇の印象を箇箇のまま、その前後左右と截り放して、其所だけはつきり、非常に鮮かな畫として記憶してゐる一方では、多くの箇箇の印象を寧ろ抽象して受けとつて、ある一つの體系の中に攝取して了ふのである。印象がさうして受とられる時、初對面にあぐらをかく者は、小宮豊隆であつてもなくつても、さういふ事は問題にならない。ただ一人の若い學生が自分の前で初對面にあぐらをかいた、さういふ稍抽象された事實だけが、先生の頭の中の一つの體系の中に或地位を占め得るものとして、先生にとつて記憶に値ひする、必要な事實となるのである。——私があとで餘計な抗議を持ち込みさへしなかつたら、先生は、自分の前で初對面にあぐらをかいたものが、私であつたか、それとも誰か外の人であつたか、そんな事は思ひ出して見もしない筈であつたといふ氣がする。

『三田文學』——三・二・七

日記の中から

暮に東洋城から、先生の十三回忌に因んで、何か先生の事を書いてくれないかと頼まれた。私は丁度その時分、明治四十一年の日記（この日記は十月十六日で終つてゐる）をさがし出してゐたので、その中から、先生と先生の周囲とに關係のある記事拾ひ出して、それで責を塞がうと思ひ立つた。然し、暮の内は何かと氣ぜはしく、やつと原稿を二三枚つくりあげた計りで、それを送る運びにはならず、到頭約束の時日をするするに流して了つた。然し折角思ひ立つた事である。今日すこし心持の暇なのを幸ひ、先きを書き續けて、ともかくも四十一年の日記の中から、拾へるものだけは拾ひ上げて見る事にしようと思ふ。もつとも日記は、第一銀行から御得意先に配る袖珍の日記で、一頁に四日割り振つてある

やうな、ごく僅しか書く場所のない日記である上に、ほんの心覚えに、符徴かなぞのやうに、一言二言ぐらゐしか書かれてゐない日が多いのだから、この書抜きは、先生に親しみを持つてゐる人か、先生を圍むグループに多少の親しみを持つてゐる人かでない限り、あまり面白いものではないかも知れない。ただ私一己としては、この日記ほど、先生や先生の周圍や當時の自分やを、事細かに思ひ出させてくれるものはない。従つて是は、無論自分の事が主になつてはゐるけれども、先生の思ひ出としても亦、少くとも私には、十分、最も適當な思ひ出の一つであり得るのである。私は、書き寫しながら、其所に書かれた一言二言の言葉から牽き出される、二十年前の、特別な世界の空氣の中に自分の頭を浸して、ある時は顔を赧らめ、ある時は顔を擗め、ある時は苦笑し、ある時は涙を浮べ、——ひつくるめては、赤ん坊のやうに得手勝手な私を、よくも厭な顔もせずにも面倒を見てくれた先生を、無限の感謝を持つて絶えず目の前に思ひ浮かべざるを得なかつた。

本來この種の記録は、讀者を豫想して書かれたものではない以上、それを公けにする際には、必ず詳細な注釋を必要とする。またその注釋を書く事は、私にとつて、決して興味

のない事ではない。然し今の私には、遺憾ながらその暇がない。甚だエゴイステックではあるが、さしあたり私は此所に、唯ありのままを、書き寫す丈に止めて置きたいと思ふ。但、明治四十一年は先生四十二、奥さん三十二、筆子さん十一、私が二十五の年であり、先生は前年の四月に朝日新聞に入社し、同じく九月の末に、西片町から早稻田へ越して來た、私は、本郷の森川町に下宿してゐて、この年の七月に大學を卒業することになつてゐる、さうして先生の面會日は木曜ときまつてゐた、といふ位な事は、注釋して置く必要がありさうである。〔『澁柿』——四・一・二〕

一月一日（水曜）

先生のうちにゐる。

一月二日（木曜）

先生のうちにゐる。

一月三日（金曜）

先生のうちにゐる

一月四日 (土曜)

先生のうちにゐる。

奥さんから紙入を貰ふ。なかなか立派な紙入だ。

午飯を済ませてから、親類へ年始廻りに出かける。

一月五日 (日曜)

下宿に歸る。鈴木の色が悪く、眼が怖ろしく光つてゐる。

一月九日 (木曜)

先生の所へ行く。野上が来た。森田が来た。卷吉が来た。はなしをしてゐるうちに虚子が来た。先生が虚子と謠を謠はうと言はれる。謠のあひだ茶の間へ行つて歌留多をとる。

『坑夫』の原稿を持つて野田九浦君の所へお使に行く。

一月十一日 (土曜)

先生から、原稿に間違つた所があるから、一寸取り返して来てくれと言つて来たので、

九浦君の所へ行く。九浦君が挿繪を見せてくれる。風景が主になつてゐる方を、なかなか面白いと言つて褒めたら、それぢや上げませうと言つて、それをくれた。

先生のうちにとまる。

一月十二日 (日曜)

ひる頃かへる。

一月十六日 (木曜)

先生の所へ行く。今日はたつた一人であつた。但「坑夫」が来てゐた。話はしつかりしてゐる。

一月二十三日 (木曜)

先生の尿から糖分が出るのださうだ。それで検査をしてもらふ事になつてゐるのださうだ。ゲートにもたしか糖尿病があつたやうに思ふ。

一月二十五日 (土曜)

先生の所へ行く。

一月三十日 (木曜)

四方太、虚子、草平、寅彦、新井。

『坑夫』を昨日書き上げたと言はれる。九十六回ださうだ。すると、四月の五日まで續く勘定になる。

二月四日 (火曜)

魂の行衛が判然しないで困る。今日は又特に氣分がわるい。三重吉と彌生亭で夕飯を喰つて、義太夫を聴きに行く。時廣といふ女が旨い。

奥さんが留守に見えたさうだ。

二月五日 (水曜)

奥さんが紋付で榮子さんを連れて見える。

二月六日 (水曜)

久しぶりで東洋城に會ふ。

野上、草平、長江、虚子、三重公。

長江の自然主義の主張は妙也。

尿の糖は食後にニプロツェントださうだ。心配するにはあたらない。

二月九日 (日曜)

先生をひつぱりだして十二社に行つた。十二社は初めてである。氣持がよかつたとまる。

二月十日 (月曜)

かへる。

二月十三日 (木曜)

先生の所へ行く。寶生新が謡をうたつた。大きな聲が出るものだ。福引がある。

爐塞いで人にくれたる庵かな、があたりつて、草鞋を貰ふ。人に庵をくれて行脚に出るんださうだ。

野村傳四新婚、大に冷かされる。

とまる。

二月十四日 (金曜)

先生のところから夕方かへる。

明日の特別入場券を貰った。中村翁が持つて来たのだ。

二月十五日 (土曜)

先生青年會館にて演説、一時間と四十分、大々的の演説なり。作者の態度の相違よりしてロマンティシズムの文學とナチュラリズムの文學とが出て來るといふにあり。

先生のうちにとまる。

二月十六日 (日曜)

散歩しようと思つたら、「坑夫」が話しがあるといふので、そして長い間話をしてゐたから、やめにした。

夜かへる。歸りに牛込亭で、奥さんと一緒に朝太夫を聴く。

二月十七日 (月曜)

今日フロ公が論文には何を書くのかと訊いたから、ケラーをやつて小説論を書くんだと

答へてやつた。

二月十八日 (火曜)

一寸先生のところに行く。改印の件。

二月二十日 (木曜)

先生のところへ行く。

三重吉おそく來る。

二月二十三日 (日曜)

もう一年になると言つたら、三重吉が、何が一年だと言つた。君を知つてからもう一年になつた、早いもんだと答へたら、まだ一年にしかならないのか、もう長い間知り合つてゐるやうだがなあと言つた。

二月二十七日 (木曜)

三重吉、野上、虚子。

二月二十八日 (金曜)

新が謡つて虚子が鼓をうつといふから、先生の所へ行つた。虚子は來たけれども、新が來なかつたから、鼓はやめになつた。

三月五日（木曜）

長江、草平、東洋城。三重吉不參。

長江草平は女性的の泣き言が好きなんださうだ。だからニイチエが好きなんださうだ。先生のもの分らないのも尤である。

三月七日（土曜）

今日は誕生日だ。雪が積つて雨が降る。夜先生のところに行く。赤飯、鯛の眼玉のつゆ、鯛の刺身、鯛の味噌焼。

とまる。

三月八日（日曜）

午頃かへる。

三月十二日（木曜）

野上。三重吉。

三月十九日（木曜）

先生のところへ行く。人に會ふのが厭になつたから來ると言つて來たが、又用が出來て來てくれと言つて來たので、行く。先生は『作者の態度』を書き直してゐられた。この原稿を下さいと頼む。

三月二十一日（土曜）

筆子さんがお萩を持つて來てくれる。おばあさまの所へ行きたいから早く歸して頂戴と言ふ。此所よりか武さんなんかと遊んだ方がいくら面白いか知れやしないと云ふ。お萩を半分づつたべて、すぐ歸す。

三月二十六日（木曜）

先生のところへ行く。頭が痛い。今日から休みになる。森田が來てゐたとまる。

三月二十七日 (金曜)

とまる。

三月二十八日 (土曜)

かへる。かへりたくなかつた。ねるときだけでいいから先生の所にねたいものだとおもふ。

三月二十九日 (日曜)

鈴木が来る。

奥さんが筆子さんと恒子さんとを連れて見える。神田の錦輝館へ活動寫眞を見に行く。

三月三十一日 (火曜)

先生が見える。今日は天氣が可いから、方方無沙汰廻りをしてゐる、朝からうちを出て、今大塚の所へ行つて来た。これから畔柳のところへ行くんだ、と言はれる。一緒にお湯に行く。それから下宿で牛肉を喰ふ。九時頃お歸りになる。

四月一日 (水曜)

頭痛、悪寒。

三重吉神明町の素人屋へ越して行く。

三重吉と夜下宿の二階で飲む。

四月二日 (木曜)

あんまり苦しいから、到頭寝込んだ。汗がだらだら出る。熱四十度三分あるといふ。苦しい。

先生の所へ行きたいから朝ねたものの、頭があがらなくなつて了つた。

四月六日 (月曜)

筆子さんが見舞に来てくれる。左の手に一杯乙女椿の花を持つて、右の胸に蜜柑と林檎との籠を抱いて、いそいそと這入つて来る。淋しかったから嬉しかった。夕飯を一緒に食べてから歸す。

四月七日 (火曜)

起きて見る。腹の底に力がない。咳嗽がむやみに出る。

四月八日 (水曜)

淋しい。三重吉がゐなくなつたので、なほいかん。

四月九日 (木曜)

雪が大に積もつてゐる。櫻の花の咲いてゐる上に、どかどかと積もつてゐる。自然が氣が違つたんだ。先生の所に行かれない。

四月十一日 (土曜)

先生が畔柳さんの所へ行つた歸りだつたと言つて、見舞に來て下さる。嬉しくてたまらなかつた。然し、病揚句だもので、送つて行つてあげる譯に行かない。

四月十四日 (火曜)

奥さんに誘はれて歌舞伎座に行く。先生はいらつしやらないんですかと言つたら、氣が向いたらあとから行くといふ返事だつたが、到頭見えなかつた。仁木が凄い。八汐も可い出来である。然しああいふ役は損な役である。うまくやればやるほど人から憎まれ、然も政岡が映えて來るんだから。

四月十五日 (水曜)

ゆうべ先生の所にとまる。今日ひるから歸る。

ゆうべ「坑夫」が歸つて來たさうだ。やかましく言つてやらうと思つてゐたら、今朝早く何所かへ出て行つたんださうだ。

四月十六日 (木曜)

先生のうちへ行く。とまる。

四月十七日 (金曜)

かへる。今井が留守に來たさうだ。

四月二十三日 (木曜)

先生のうちへ行く。とまる。

四月二十四日 (金曜)

かへる。三重吉が來て待つてゐた。三重吉病氣にかかる。可哀想なり。元氣なし。

四月二十五日 (土曜)

奥さんが筆子さんを連れて見える。寶亭で夕飯を喰つてから、神田を散歩。歸つたら十時だった。

四月三十日 (木曜)

論文を書き上げる。論文を書き上げたら、まづ先生に見せようと思つて、それをたのしみに五日あまり外出しないで清書した。ところが出来あがつて見ると、なんだか急に厭な氣がし出した。現實暴露の悲哀か勝利の悲哀か、何かしらぬが無闇に情なくなつて、折角意氣揚揚と先生の所に論文を抱いて行かうと思つてゐた心算が、めちやめちやに毀れて了つた。それで、いきなり松永の所へ持つて行く。それでも、提出して置いて門を出る時には、先生に見せなかつたのが惜しいやうな氣にもなつた。

先生のところへ行く。とまる。

奥さんはあの翌日から工合がわるいのださうだ。赤ん坊が生れるのださうだ。

五月一日 (金曜)

夜おそくかへる。

五月二日 (土曜)

先生のところへ行く。

夜筆子さんを連れて幟を買ひに行く。

五月三日 (日曜)

先生に〇〇〇を貰はうと言ふ。奥さんは反対だと言はれる。

五月四日 (月曜)

雨がふる。鈴木のところへ行つて萬事をたのむ。

五月五日 (火曜)

鈴木が〇のところへ行つてくれた。然し〇〇〇はもう約束がすんでゐるんださうだ。

五月七日 (木曜)

夜になつて先生のところに行く。

五月八日 (金曜)

日記の中から

歸らうと思つたけれども、歸るのがいやになつて、歸らない。

五月九日（土曜）

今日も學校に出たくないから、まだゐる。

先生は『朝日』の會で午飯には留守。早く歸つて来て下さると可いと思つてゐたら、歸りは車で歸つていらつしやつた。

五月十日（日曜）

筆はあなたが好きなんだから、筆が大きくなならないうちに、お嫁を貰つて下さい、さうしないとあの子が可哀想だから、と奥さんが言はれた。

夜十時に歸る。

五月十一日（月曜）

若竹に小さん聞きに行つたら、〇〇〇によく似た女に會つた。〇〇〇がもう十年もたつて子供の二人も出來たら、きつとかういふ顔になるに違ひない。

五月十四日（木曜）

先生のところへ行く。三重吉が『烏物語』を読む。
とまる。

五月十五日（金曜）

筆子さんを連れて大學病院の渡邊さんの所に行く。ルイレキなんださうだ。彌生亭に行つて飯を食べて、下宿に連れて來る。夜、車にのせて早稲田へ行く。車の上で筆子さんは抱かつたまま寝てしまふ。

遅く歸る。

五月十六日（土曜）

俳句の會。

東洋城が來る。とまる。

五月十八日（月曜）

白河の伯父の葬儀につらなる。

歸りに神保町で先生に會ふ。すぐおりて一緒に散歩してから、歸る。

五月二十一日 (木曜)

先生のところへ行く。

五月二十五日 (月曜)

先生のところへ行く。

五月二十八日 (木曜)

先生のところへ行く。とまる。

五月二十九日 (金曜)

夕方かへつて来る。

五月三十日 (土曜)

先生のところへ行く。

六月五日 (金曜)

今日フロレンツの口頭試験がある。

先生のうちへ行く。とまる。

今日は純一さんの誕生日である。

六月六日 (土曜)

夕方かへる。

六月七日 (日曜)

先生のうちへ行く。筆子さんと恒子さんとを連れて東京座のお伽芝居を見に行く。遅すぎて這入れない。錦輝館で活動寫眞を見て歸つて来る。

夜おそく歸る。

六月十一日 (木曜)

先生のところへ行く。

夜おそく歸る。途中で雨に濡れる。とまればよかつたと思ふ。

六月十八日 (木曜)

先生のところへ行く。

とまる。

六月十九日 (金曜)

夜おそくかへる。

菊枝さんは十六なんださうだ。さうして結核なんだらうといふ。

六月二十四日 (水曜)

成績が発表される。

六月二十五日 (木曜)

先生のところへ行く。

三重吉、東洋城と三人でとまる。

六月二十六日 (金曜)

三重吉、東洋城かへる。

夜に入りて牛込亭に先生と小さんの『うどんや』を聴くとまる。

六月二十八日 (日曜)

三重吉と一緒に今井のうちへ行く。あの邊は實に氣持が可い。

空虚。衷心戚戚。

七月二日 (木曜)

先生のところへ行く。

先生にこのごろの心持を訴へる。先生笑つて、そんなに充實してたまるもんかと言はれる。お前はおれのうちに來る人間のうちでは、一番ノーブル・ビーイングなんだから、下らない事を苦にしなくても可い、と言はれる。

七月三日 (金曜)

朝のうちに歸る。三重吉の所に行つて見る。足がはれ、首のグリグリがはれ、脛がはれてゐる。

奥さんが見える。

七月六日 (月曜)

三重吉をつれて明治病院へ行く。やつちゃんに會つて萬事をたのむ。八町とかいふ人が

施術をしてくれた。施術の間三重吉をつかまへてやつた。施術は眼をあいて見てゐられな
い。

七月八日（水曜）

三重吉のお父さんが病氣が重くなつたから歸つて来いと伯母さんから手紙が来たといふ。
明日朝八時に立つといふ。金があるかと言つたら、あると答へた。

七月九日（木曜）

三重吉を新橋まで送つて行く。三重吉は首と足とに繻帯してゐる。首をかしげてびつこ
をひいてゐる。

先生のところへ行く。出入の洋服屋に洋服をあつらへる。とまる。

七月十日（金曜）

かへる。

奥さんが墓参りをして里に行つたからと言つて見える。夕飯をうちで一緒に食べる。
ゆうべ三重吉のお父さんが亡くなつたさうだ。謹爾を立たせる。

七月十一日（土曜）

卒業式がある。陛下に咫尺する。

七月十二日（日曜）

先生を誘つて常盤木倶楽部の研究会へ行かうと思つたが、先生は留守だつた。浅草とか
へいらしつたと言ふ。夕方までゐて歸つて来る。

七月十六日（木曜）

先生のところへ行く。洋服が出来て来てゐる。著て見ると、自分のからだは竹の筒のや
うに見える。いやな氣がする。洋服は著ない事にしようと思ふ。

東洋城が来てゐる。とまる。

七月十七日（金曜）

とまる。

七月十八日（土曜）

第一銀行へ行つて金を三千六百五十圓犬塚に渡す。先生は是で第一銀行の株を五十株買

つて貰ふんださうである。それから歸る。

午後筆子さんが来る。病院へつれて行く。

夜奥さんの榮子さんだのと本郷座に活動寫真を見に行く。

七月十九日 (日曜)

朝先生のところへ行く。リウセイを買つて行く。

高楠さんの所へ行く、留守。

七月二十一日 (火曜)

奥さん筆子さん來。

七月二十三日 (木曜)

犬塚へ行つて見ると、國から電報が來てゐて、いつかへるかしらせ、とある。驚ろいて二十五日に立つ旨返事する。

先生のところへ行く。とまる。

七月二十四日 (金曜)

支度でいそがしい。

奥さん筆子さんをつれて來。松根の所へ行かうと昨日約束したからである。然し今日はやめたいと言ふ。一緒に牛込へ行く。

七月二十五日 (土曜)

朝八時に立つ。

九月二日 (水曜)

郷里出發。汽車の中で『三四郎』を読む。何だか自分の事が書いてあるやうな氣がする。

九月三日 (木曜)

尾の道に朝つく。濱吉へ行つて伯父をおどろかす。

『三四郎』の中に「京都郡」とあるので驚く。これから先が氣がかりである。

高松に行く。

九月四日 (金曜)

日記の中から

『三四郎』がいよいよあやしくなつて来る。

九月八日（火曜）

朝京都に著く。茅野のところへ行つたら、茅野は留守だつた。荷物を置いて友枝のところへ行く。

九月十日（木曜）

朝新橋につく。いきなり先生のところへ行く。高松の烟草入と盆とを上げる。静岡の鯛飯と山北の鮎の鮓。

九月十一日（金曜）

とまる。筆子さんを連れて、新橋に荷物をとりに行く。

先生が犬塚に會つたら、小宮はまだ歸つて参りませんと言つてゐたさうだ。

九月十二日（土曜）

下宿に行く。

九月十四日（月曜）

ゆうべ先生のうちの猫が死んださうだ。

九月十五日（火曜）

奥さんが見える。中根さんでお父さんの法事があるのださうだ。

九月十七日（木曜）

先生のところへ行く。野上、草平。天才論をする。とまる。

九月十八日（金曜）

かへる。

九月二十日（日曜）

三重吉が来る。京都の菓子を土産にくれる。

筆子さんと恒子さんが来る。

九月二十一日（月曜）

中と鈴木と三人して長唄研精會へ行く。中の妹はお嫁に行つたんださうだ。

九月二十四日 (木曜)

先生のところに行く。雨が降つたせゐか、客は自分一人きりだつた。横になつて、雨を聞きながら話をする。

九月二十五日 (金曜)

かへる。ひるから又行く。夜おそく歸る。鈴木が留守に來たといふ。

九月二十六日 (土曜)

三重吉が成田に行くにきまつたさうだ。

九月二十七日 (日曜)

三重吉と平野屋で飲む。なんだか與次郎と三四郎みたやうな氣がしてならない。

九月二十九日 (火曜)

頭がいたい。

寺田さんが博士になる由新聞に出てゐた。なんだか甚だ愉快だつたので、お喜びのはがきを出す。十月一日に文部省で貰ふんださうだ。

十月一日 (木曜)

先生のところへ行く。とまる。

十月二日 (金曜)

夜おそくかへる。

十月四日 (日曜)

犬塚へお七夜の客にまねかれる。それから先生のところへまわる。おそくかへる。

十月六日 (火曜)

先生のところへ行く。奥さんが約束の卒業祝をして下さる。寺田さんは博士になつたので、一緒にお祝をするのださうだ。寺田さん、三重吉、野上。

『三四郎』は昨日で済んだと先生の話。丁度丸二月かかつた事になる。

十月七日 (水曜)

新に謠を習はうと思ひ立つ。野上に一緒に行つて貰ふ。稽古場は虚子のうちである。然し新は、今日は用があるから、それに本の用意もしてないから、來週からにしてくれと言

つた。

虚子は大家振つた事を言つてゐる。

十月八日 (木曜)

先生のところへ行く。とまる。

十月九日 (金曜)

ひるから『朝日』へ『三四郎』の原稿を届けに行く。

十月十日 (土曜)

今日は遠足する約束があるので、朝早く、三重吉と車をつらねて先生のところへ行く。寺田さんはもう来てゐた。いざ出かけようといふ時になつて野上も来る。

八王子。

夜十時頃かへりつく。

十月十一日 (日曜)

先生を誘つて落語研究会に行く。少し遅かつたので、席が後ろの方である。よく聴こえ

ない。小さんがすんでから、すぐ歸る。

十月十二日 (月曜)

筆子さんを連れて、今井と一緒に、中島といふヴァイオリンの先生の所へ行く。中島といふ人は、落語のから熊のやうな感じがあるが、話をしてゐてちつとも氣の置けない人である。

十月十四日 (水曜)

三重吉が来て、明日成田へ立つと言ふ。

夜一緒に朝重を聴きに行く。朝重は暫く聴かない内に、大變うまくなつたやうである。ある點では昇之助よりもうまい。昇之助と同じカテゴリに屬するもので、然も未來を餘計に持つてゐる。

十月十五日 (木曜)

三重吉一時の汽車で日暮里から立つ。プラットフォームに立つてゐると、雨がぼつりぼつりと降つて來た。

日記の中から

柿赤し人乗せて去る

汽車の曲りけり

先生のところへ行く。とまる。林が小説を持つて来たさうだ。読んで見て、つまらないと思ふ。

十月十六日（金曜）

ひるからかへる。

林のところへ行つて小説をかへして批評をする。

ウルバンといふ男は岩野泡鳴のやうな男ぢやないかと思ふ。

昭和十年五月五日印刷
昭和十年五月十四日發行

漱石襟記
定價貳圓

版權所有

著者 小宮豊隆

發行者 東京市小石川區諏訪町五十九番地
小山久二郎

印刷者 東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

精興社印刷
福神製本所製本

10.5.10

發行所

東京市小石川區
諏訪町五十九番地
電話替東京三九八七二番
小石川七五七五番

小山書店

小 山 書 店 刊 行 書

小 宮 豐 隆 著

黃 金 蟲

木下 幸太郎 裝幀
表紙 木版 十六度刷
定 價 四六判 三〇八頁
送 料 小包 十二錢

小宮豐隆氏が現代第一流の藝術鑑賞家であり、理論家であることは、具眼者の否定し得ざる所である。路傍に棄てられた落葉の如き事物も、一旦氏の手に觸れ、氏の頭腦に剖折され、氏の凝性の追究に遇ふと、急に意義と價值とを附與されて夕日を浴びた如くに光輝を放つ。氏は實に「特殊」を見出す「勘」の人であると共に、其を丹念に「普遍」へ繋ぎ合す科學者的頭腦である。本書收むる所は、興味津々たる西歐の印象や、滋味豊かな時々の感想の他に、殆ど氏獨特ともいふべき日本文化、藝術、言語に對する傑れた諸々の考察である。そこ我々はこの書の中に近來の名著なる氏の「芭蕉研究」の有する精刻と透徹を見出すに止らず更に彼に見られぬ寛ぎと親しさとを見出すことを讀者と共に喜びとしたい。

小 山 書 店 刊 行 書

小泉八雲
秘稿畫本

妖

魔 詩 話

小泉一雄編著

限定版八圓

一 目 小 僧 そ の 他

柳田國男著

定價 三、〇〇

柿 の 種

寺田寅彦著

定價 二、〇〇

黃 金 蟲

小宮豐隆著

定價 二、〇〇

漱 石 襪 記

小宮豐隆著

定價 二、〇〇

ギリシヤとスカンディナヴィヤ

安倍能成著

定價 二、三〇

自 然 と も に

長與善郎著

定價 二、〇〇

新 俳 文

高濱虛子著

定價 二、〇〇

書 道 と 畫 道

津田青楓著

定價 二、〇〇

隨筆集 雲・章・人

平塚明子著

定價 二、〇〇

入學試驗お伴の記その他

野上彌生子著

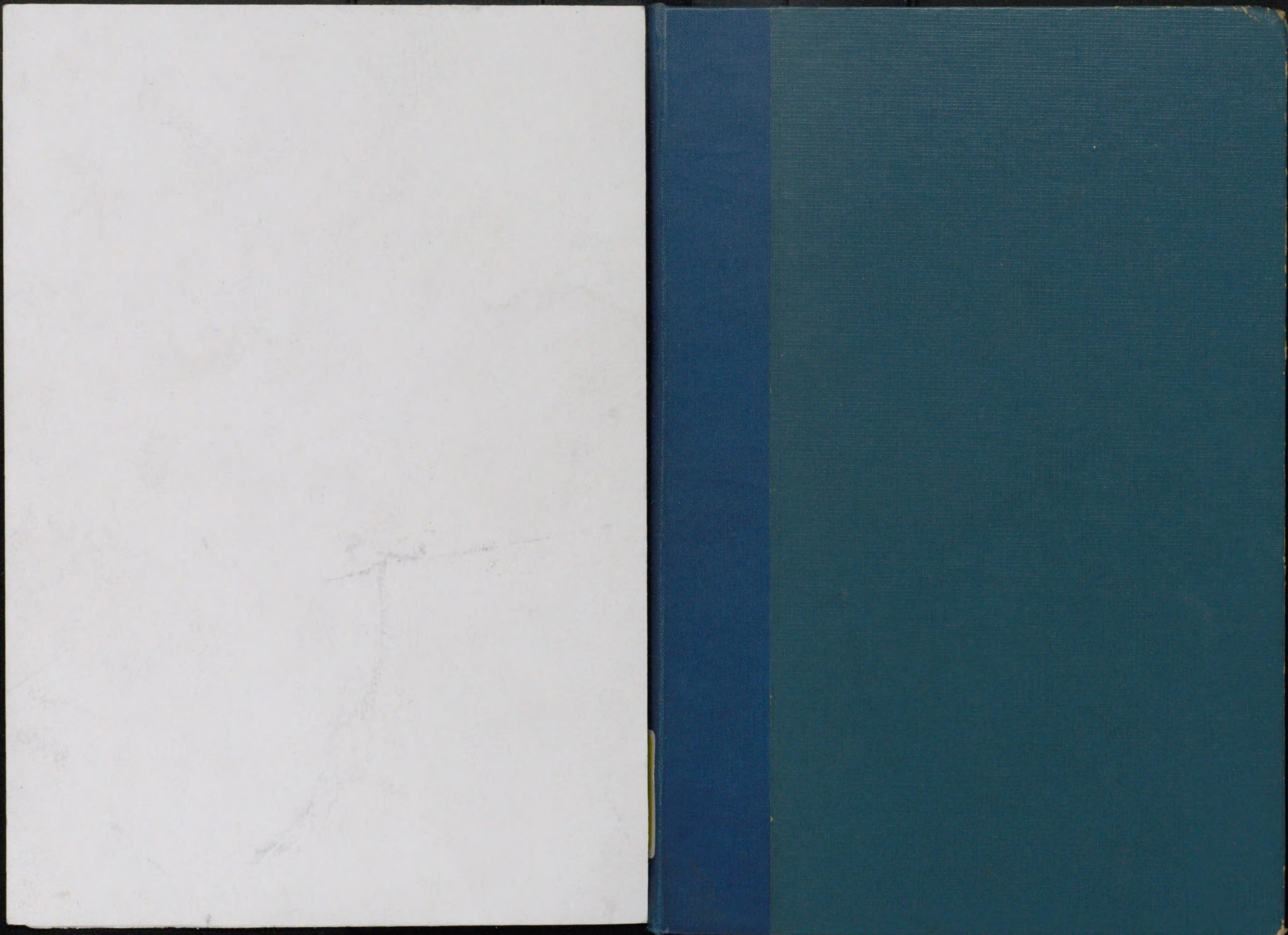
定價 一、二〇

小山書店刊行書

増 版	内 部	思 想	文 藝	ジ イ ド 思 索	ク レ ミ ウ 不 安	維 納 の 殺 人 容 疑 者	フ オ ス レ ル 言 語	レ ギ ブ リ ユ ル 未 開 社 會 の 思 惟	ハ ム レ ッ ト	ロ ミ オ と ジ ュ リ エ ッ ト
心 理 學 概 論	と 外 部	遠 近	復 興	と 隨 想	と 再 建	佐 藤 春 夫 著	美 學	山 田 吉 彦 譯	本 多 顯 彰 譯	本 多 顯 彰 譯
増 田 惟 茂 著	谷 川 徹 三 著	谷 川 徹 三 著	林 達 夫 著	山 内 義 雄 他 六 氏 譯	増 田 篤 雄 譯	定 價 二、三〇	小 林 英 夫 譯	(近 刊)	定 價 一、五〇	定 價 一、五〇
定 價 一、八〇	定 價 二、五〇	定 價 二、三〇	定 價 二、〇〇	定 價 一、七〇	定 價 二、〇〇		(近 刊)			

609

434

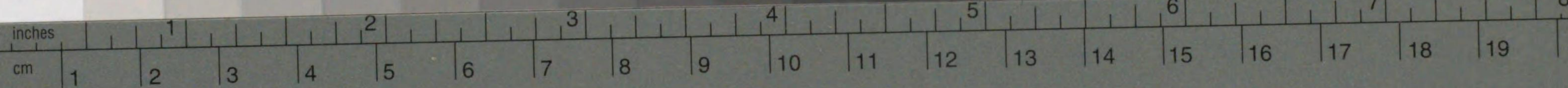


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

